第一部　おふくろたちの労働運動

▽出席者

新本ヤエノ　77歳（愛媛・新居浜）
島田紀代子　66歳（福岡・大牟田）
大道　俊　76歳（京都・西陣＝元）
浜本　華子　61歳（北海道本部）
武内スミヱ　75歳（神奈川・川崎連合）
武田　律子　61歳（高知県本部）
菅原　絹枝　72歳（神奈川・鶴見）
原　喜代子　63歳（神奈川県本部）
伊藤　テル　70歳（山形・山形）
坂口あさ子　55歳（東京都本部）
横尾　ゆき　69歳（東京・飯田橋）
松沢　悦子（中央本部婦人部長）
司会　栗山　嘉明（中央本部教宣部長）

一　どっこい生きている
――どうしようどうしようの民主主義

戦後の日本には、軍隊からの復員と外地からの引きあげ者、戦争で夫や家族をうしなった婦人たち、工場閉鎖で放りだされた人たちなど一〇〇〇万人をこえる失業者があふれていました。

さらに、一九五〇（昭和二五）年に始まる朝鮮戦争を前にして、日本の経済をアメリカの思うままに再建する目的でおこなわれた「ドッジ・ライン」という名の政策によって、国鉄や郵便局をはじめ官公庁の大量首切りや、中小企業の倒産などがあいついでおこり、共産党員や労働組合の活動家がつぎつぎに首をきられるレッド・パージが強行されました。このとき首をきられた人は、一〇〇万人をこすといわれています。

アメリカ占領軍は、このまますててておくと社会不安がおこるとみて、一九四九（昭和二四）年五月、「日雇失業保険制度」と「失業対策事業」の二本を柱とした「緊急失業対策法」をつくらせました。こうして生まれたのが「失対事業」です。

このように、失対事業は、首切りや賃金ひきさげの「合理化」をスムーズにすすめ、社会不安を一時おさえるための応急対策として出発しましたから、予算も少なく、月に一〇日くらいしか働けず、賃金も、長いあいだ「ニコヨン」とよばれたように、二四〇円（もっと低い地域、時期もあった）という低賃金におさえられていました。こうしたなかで、生きんがため、食わんがため、子どもを育てんがための、死にものぐるいのたたかいにたちあがらざるをえませんでした。

雨や風には　ひるみはせぬが
ニコヨンぐらしにゃ　アブレがこわい
晩の　のみしろほしくはないが
かえりまってる　ガキ可愛い
そうだよ　ドッコイ
ドッコイ　おいらは生きている

●私が失対事業に入ったころ

司会　みなさんが失対事業に入ったころは、どんな状態でしたか。

菅原　夫は軍需工場で働いていましたから、失業して体もこわしてしまい、五人の子をかかえて私が失対に入ったのは一九五〇（昭和二五）年二月でした。

仕事も少なかったし、家がない人も多かったですから、鶴見の職安前には夜中からたき火をして待っている人もいました。紹介時間がくると、二〇〇〇人ぐらいの失業者が窓口にワーッとおしよせるので、私なんか、とても仕事にありつけませんでした。どういうわけか、おかまのような人が私のところにきて、「そんなんじゃだめよ、私がいれてあげる」とかいって、かわりに手帳をだしてくれるようになったんだけど、それでも月に一〇日働けるかどうかでした。

横尾　私も同じ一九五〇年に飯田橋で失対に入ったんですけど、職安前にはバラックが

菅原さん

横尾さん

建ち並び、六〇〇人くらいの登録者がいて、やっぱり早いもの勝ちで紹介されていました。朝五時ころに起きて行っても仕事にありつけないことがよくありました。

それに、女のボスが男をふくめて全体をしきっていて、番とりをさせたり、横から入ってきたり、いい仕事をみんな先取りしちゃったりするんです。アタマにきたので、自分で番号札をつくり、朝早く行って、並んだ順番にわたしたんです。そうしたら、「新米のくせになまいきだ」といわれて、そのボスと、とっくみあいの大ゲンカになったんです。ところが私が勝っちゃってね。それからは姉妹みたいに仲よくなって、こっちがボスにさせられちゃったんです。それで、不良の連中が「ヨロク」で、水道管を盗んできたりするのの上まえをハネて、自分の班のなかまに五〇円ずつとか、平等にわけたりしました。

そんなものだから、あとで組合の財政係にさせられたときは、おっかながって滞納する者がいなくなっちゃいました。

早おき競争からアブレ反対闘争

つぎはぎズボンをみんなはいて

昭和二十三年ごろは賃金は百四十二円、女は五人ぐらいで、男も百人ぐらいしかいませんでした。やけあとをかたづける仕事でしたが道具がたりなくて、つったっていることが多く、リヤカーに何人もついてすてにいくのです。当時は服そうはぼ

伊藤さん

新本さん

ろぼろで、おちているきれは色がアカでもなんでもひろって、つぎのうえにつぎをあてて着ました。なかまはみんなルンペンのようなかっこうで働かなければなりませんでした。

はやじまいがモチ代だったころ

このとしの大みそかまでぎりぎり働いて、四時半じまいを、二時にあがったのが「モチ代」で、正月一日は賃金なしで休み、二日はひるじまいで賃金をもらったのが「お年玉」でした。

仕事をしていると金クズが出てきて、それをあつめて売る「ヨロク」の方が仕事のような状たいでした。

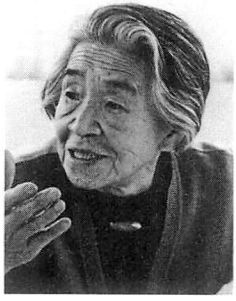
二十五年ごろは、もう親子が失対にでることができず、民生委員の証明がいるなど、やかましくなり、賃金は百八十五円でした。

ニコヨン（二百四十円＝百円を一コ二コといったヤクザのことばからでたのではないか、ということです）になるまでが大へんでした。

競争や番号からアブレ反対闘争

まだ番号がついてないときだったので、早くいかなければ、アブレてしまうのです。だから、早おき競争がはじまり、前の夜からならんだり、夜のあけないうちにきてまっている人たちが、たくさんありました。五時ごろの一番電車でくると、もうビリケツの方なのです。

神田橋職安にはグレン隊がずい分はいっていて、早くから就労の番をとらなけれ



武内さん

浜本さん

ばならないため、つかれて仕事ができません。グレン隊は、カードをきったらバクチやマージャン屋で一日あそんで、夕方になって賃金をもらっていました。

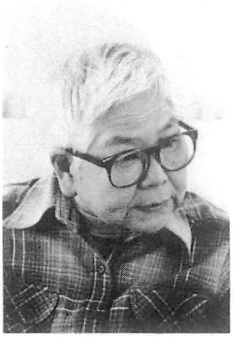
（『じかたび』一九六六年一月三日より）

新本　朝二時ころから、泣く子を家において職安前に行列し、自分の番を待っていたのに、目の前でその日の枠がなくなり、無情にも窓がしまったときのつらかったこと、今日の食糧をどうして求めるか、母親の心の苦労の始まりでしたね。

私は岡山にいたとき、B52の爆弾で父ちゃんが殺され、親も早く亡くなっていましたから、六人の子をかかえて工場のある新居浜にきたんですが、ここでも仕事がなく、農家のひろい仕事や小間物の行商などをしていました。でも、食べるのに追いついていけなくて、子どもたちをよびよせては、「かあさんといっしょに死んでくれ」と、この世に大きなあきらめをつけようとしたこともたびたびでした。そのつど、一〇歳になった長男と次男が私の背中にしがみつき、「かあさん、死んではいかん、ぼくたちが大きくなったら、たくさん金をもうけて、かあさんを助けるから」と、いっしょに泣いてくれました。

人におしえられて、はじめて職安の窓口をたずねたとき、係りの人から「おばさんは生活保護をうけているか」ときかれました。「生活保護とはなんですか」ときくと、「じゃ、いまから民生課に行こう」といって、手つづきをとってくれ、さかのぼって二ヵ月分の保

島田さん



大道さん

護をもらえたんです。そのうれしかったことね。

そして、失対には一九五三（昭和二八）年に入りました。紹介のしかたは輪番制になっていましたけど、一日も休まずに働いても月一三日がやっとで、日雇失業保険の資格もとれませんでした。

伊藤　私も亭主に死なれて、五人の子をかかえて一九五一（昭和二六）年に失対に入ったんですけど、土地のない貧乏な農民や、「無縁故疎開」といって、引きあげてきたけど、どこにも行くあてがないという人がいっぱいでした。こういう人たちは、五〇世帯、一〇〇世帯とかたまってバラックをたてて、「満州長屋」とか「樺太長屋」とかよばれるところに住んでいました。だんなさんがまだ帰ってきていない女の人もたくさん失対に入っていました。

大道　私も一九五一年に失対に入ったのですが、京都は爆撃をうけていませんから、近県からも焼けだされた人たちがあつまってきて、京都市内で一万五〇〇〇人くらいいました。そのうち私のいた西陣には七〇〇〇人以上いたと思います。

朝五時ころ職安に行くと、くらやみの中にシラミをつけたまんまで、ベルトがないから縄の腰ひもをつけた人たちがワーッといるんです。その三分の一が朝鮮人、三分の一が同和地区の出身者、三分の一がその他の戦争未亡人や引きあげ者でしたが、生きていくのに必死だから、ほんとうは助けあわなければならないのに、自分のことだけ考えて、けいべつしあっているという状態もありました。

武田さん

坂口さん

島田　私は満州のハルピンから引きあげてきたんですが、むこうにいたときから病気ばかりしていた亭主は、結核から脊椎カリエスになり、大牟田にもどって少し働いたあと、一二年間、ねたきりでした。そんな亭主と、四人の子と、死んだ弟の子と、おばあちゃんと、八人の生活が私の肩にかかっていました。

私が失対に入った一九五三（昭和二八）年のころは、みんなボロを着て、地下足袋も満足にそろったのをはいている人はいないし、雨がふってもカサをもってる人はだれもいませんでした。きたないからといって、メーデーにも参加させてもらえないほどでした。あれは、とてもくやしい思い出ですね。

●石炭を盗りにいったことも

浜本　私は樺太から引きあげてきたんですが、病気の亭主と母と息子を一人かかえて、夕張の山の中でどうやってくらしていくかということしか考えていませんでした。

失対には一九五〇年に入りましたけど、焚きものがなければ冬はこせませんから、石炭のかっぱらいもやりました。南京袋をせおって、山に行ったり、朝早く駅に行って、貨車の中から盗ってきたりするんです。出ないはずの貨車が出ちゃって、四〇分くらいかかる大夕張の駅までつれていかれ、むこうの駅長に帰りの汽車賃をかりて帰ってきたなんていう人もいました。朝なんか行列をつくって盗っていましたし、始末書もガリ版で印刷して、つかまるたびに、ちがう名前を言っていました。

ある晩、南京袋を背おって、五、六人で貯炭場に盗りに行ったとき、もう亡くなったお

松沢さん

原さん

ばさんが「重くて起きられないんだけど、手をかしてよ。そんなに入れたつもりはないんだけど、しょえないんだよ」というので、ひょっと後をみたら、見張りがそのおばさんの袋をおさえていました。それに気がつかないで、「立たないんだ、立たないんだ」って。「立たないよ、おばさん。つかまったんだもの」っていったら、「エッ！」って。

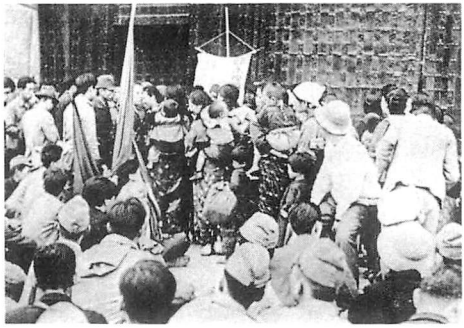
それで、見張りに「おばさん、なんて名前だ」って聞かれたら、「私の名前なんてったっけ」って私に聞くんです。つかまるたんびにウソ言ってるから自分でもわからなくなっちゃったのね。適当に答えたら、「そうだそうだ」って。

いまじゃ笑い話ですけど、そのころは真剣でした。町の飲み屋に売りに行くと、リンゴ箱一箱で一〇〇円くらいになって、子どもにパンを買ってやれたんですけど、持ちきれないから、一日に三回くらい盗りに行かないと、一箱にならないんです。うちでつかう分もいるしね。ほんとうに、炭鉱の街に住んでいるのに、炭が買えなかったんですよ。

●学校の先生が組合づくりを教えてくれた

武田　私もそうですが、高知では同和地区からたくさんの人が失対にきていました。失対は、さげすみの目で見られていて、亭主が失業して、一九五二（昭和二七）年に私が失対に入ったときは、里の親からも「お国にめいわくをかけるとは」と怒られました。

失対の現場小屋には焚きものもなく、よこせと言ったら、監督が「山へとりにいけ」と言うんです。それで、「あの山は県の山か」とたしかめたら、そうだというので行ったら、あとで警察からよびだしがきたんです。派出所へ行って「監督に確認したんだ」と話した



宮城に米よこせと押しかけた人々

ら、いろいろ連絡をとりあってましたけど、監督とも大ゲンカをして、それから焚きものがでるようになりました。

都会ではレッドパージの人がいっぱい入ってきて組合を指導したんでしょうけど、地方では学校の先生が、子どものことだけでなく、組合づくりもおしえてくれました。夜、私の家にもよくたずねてきて、「要求で団結すること」とか指導してくれました。私は一二、三歳のときから地引き網をひっぱり、夜は桂浜でデートしている男女に石をぶつけたりして遊んで、ケンカっ早くなっていましたから、目をつけられたのかもしれませんね。

●託児所をつくれ

司会　そうした状態の中から、「仕事よこせ」「アブレ反対」「全員就労させろ」「モチ代（年末手当）よこせ」などのたたかいがすすんでいくわけですが、そのころの婦人のなかまの中心的な要求、闘争はどういうものでしたか。

伊藤　そのころの要求は、やっぱり託児所です。保育所がなかったから、子どもを失対の現場の河原や公園につれてきて、花むしろでかこんでたんですけど、これではどうにもなりませんでした。

菅原　失対に入る人が日ごとにふえてくると、職安はうるさくなって、「子づれはクビに

「いっそ、由子を殺して死んじゃおう。死ねばこんな苦労をしなくてもよい。そんなこと

を私しゃ何度考えたか知れやしない」そう言ってお藤さんは、節くれ立った五本の指で目頭をおさえ水っぱなをすすりあげた。

戦死した夫が残した二人の子供のうち八つになる長男を栄養失調で死なし、どうにもやりくりがつかなくなり、職安の日雇になる腹をきめた。

けれど、思ったことは六つになる由子の処置だった。千円もかかる幼稚園にはとても入れられないし預かってくれる知人もなかった。さんざん考えた末思いついたのが押入れに入れておくことだった。なけなしの金でカギを買い、押入れにつけて仕事に出る決心をした。

その朝、お藤さんは、さつまいもの入った丼と水の入ったヤカンとともに、気狂いのように泣き叫ぶ子供を無理やり押入れにおしこんで、心を鬼にして家をとび出した。

夕方、ひっくり返ったヤカンの水と小便にぬれた布団やボロ切れの上に、涙で汚れた子供のあどけない寝乱れ姿を見た時、押入れの前にペタリと座ったきりのお藤さんは一晩中子供を抱えて泣き通した。生きることの苦しさ、貧乏のみじめさが、この時ぐらい身にしみたことはなかった。（『自労婦人しんぶん』三～四号、一九五八年五月二〇日、六月五日）

する」と言いだしました。子どもを松の木にゆわえつけておいて紹介をうけ、仕事中は、暑かろうが寒かろうが、むしろの上に座らせておく、という人がふえてきました。

「いつまでもこれじゃダメだ。私たちはこんなふうにして育ってこなかったね」と相談す

尾道で地域ぐるみの運動

ると、「子どもをあずけるところさえあれば、好きこのんでこんなところへつれてこやしない」「お産して三日か四日目に首がおちそうな子を手ぬぐいでおさえながら来やしない」「託児所をつくろう」ということになったんです。

それで、賃金カットされないよう、土木事務所とかけあいながら、毎日一〇人や二〇人は、市役所へおしかけました。つぎはぎだらけのモンペにおむつをいれた袋をさげていくと、職員はくさいといって逃げだしましたけど、私たちは一生けんめいです。

やっと、お寺をかりてやることになったら、五〇人くらいあつまりましたけど、どの子もおできができて、シラミがついてて。それからまもなく、市から保母さんが二人ついて、なかまからも一〇人ほど手つだいをだして、保育所ができました。これが一九五一（昭和二六）年のことです。

武内　私は一九五二（昭和二七）年に失対に入りました。師範学校をでていたんですが、離婚したときは四一歳になっていましたから年齢制限で教師にもなれず、川崎市の職員にという話もありましたが、子どもの手をひっぱって行ったらだめだというんです。

「失対なら、子どもをつれてでも行ってるよ」というので申しこみました。戸籍とう本とか、離婚証明とか、主たる家計の担当者であるという民生委員の証明とか、いろいろなむずかしい審査のうえ、申しこんで一ヵ月あまりたって、やっと「失対手帳」がもらえました。その間、質屋がよいで食いつなぎました。いよいよ「質草」もなくなったところでしたので、これで生きていかれると、こんなうれしいことは今もわすれることができません。

大分でお寺をかりて日曜保育

ところが、ここでは、小さい子をおぶったままスコップをふるっているし、そこらへんで遊ばせている子はドブに落っこちたり、車にひかれそうになったりでしょ。だから、子どもをあずけるところをつくろうと、子づれの母親たちの相談がまとまり、青空天井に、むしろじきの現場託児所から始めました。そして、この実態を見にこいと、市や県をひっぱってきて、しまいにはメーデーに、子どもをのせたリヤカーをだして労組協議会にとりあげてもらい、市長もうごかしていったんです。

神奈川は、たぶん全国で最初に県支部の婦人部をつくった（一九五三年九月）と思うんですが、菅原さんのところの鶴見をはじめ、県内どこでも保育所をつくっていくたたかいのなかで婦人部ができました。

新本　新居浜でも、婦人部をつくってがんばろうとなったのは、託児所と、放課後のカギッ子のもんだいでした。私たちは「放課学園」といっていましたが、学童保育所です。それでものすごく助かったというのが、婦人が結集する力になりました。

それから、子どもを四人、五人とかかえた未亡人に、ないしょのだんなさんができたからといって、保護がうちきられたりすると、毎日毎日、休み時間のたんびに民生課まで行き、交渉して、一人ひとり生活保護をとりもどすたたかいをしました。

●母性保護のたたかいの発展

司会　託児所の運動がすすんできて、子どもを現場につれていかなくてもすむようになると、自分の体がたいへんだ、こんどは生理休暇をとろうということで、母性保護のたた

かいが発展しますね。

菅原　私たちには、生理休暇も産休もなかったんです。「日雇いだから」ということで、どうしてもとれなかったんですけど、私たちの方でも年をとった婦人がおおくて、なかなか運動がすすまなかったんですね。

私たちが生理休暇を要求しようというと、三〇代～五〇代の婦人のなかまは「若い人たちはぜいたくだ。むかしは、そんなこと口にもだせなかった。ズーズーしい。生理のあるうちは元気だってことだ。年をとったものはどうしてくれる」というんです。

それで、「生理休暇っていうのは、若い人だけじゃないんだ。年をとればとったなりに、めまいがするとか、つらいときがあるよね。そういうとき、休んでいいんだから」と話して、やっと、その気になってもらえました。その点、男の人たちの方がすぐ協力してくれましたね。若い人がおおぜいいたせいもあるだろうけど、「おれたちが金をだすわけじゃないからいいよ」っていってね。

それから、土木所長に団交を申し入れ、三〇〇人近くの組合員全員で、三日間、そんな長い時間じゃないけど、毎日交渉しました。そうすると、所長は「生理休暇って何日ほしいのか、一週間か」っていうから、こっちもびっくりして、「そんなにいりやしないけど、三日はほしい」ってたのんだら、「なんだ三日くらいでいいのか」ってことになって、市の課長も「日雇いだから公然とはみとめられないけど、労働者にちがいはないからいいよ」といってくれたんです。

これは一九五六（昭和三一）年のことですけど、このたたかいは横浜市従（職員組合）の婦人部がすごく協力してくれたんですね。というのは、制度があっても、なかなかとれなかったらしいんです。私たちがとれたら、「日雇いのおばさんたちも生休がきちんととれるんだから、自分たちだって当然」ということで、とりやすくなったって話をききました。

大道　産休のことですが、大牟田の婦人がお産をして三日目に仕事にでて、大出血してたいへんなことになったということがありました。これも、たしか一九五六年のことです。大牟田では、橋爪さんという、お産婆さんだったなかまが中心になって、こんなむごいことはゆるせない、とたちあがって、上京して全国のなかまにうったえたんですね。

島田　ええ。産前産後の有給休暇は、「日々雇用だから」の一点張りでみとめてもらえませんでしたけど、お産をしても仕事を休めば食べていけませんから、産後三日目ころ、起きられるようになった人をリヤカーにのせて、職安窓口につれていったこともあります。食べるものもないから顔色がわるい。それで、手ぬぐいでほっかぶりをさせて、横をむかせてかかえるようにして手帳をださせたものです。

そんなところから、「子持ち班」をつくる運動が始まりました。市と交渉して、伝染病院の廃材をもらってきて、公園に小屋をたてて、産前は九ヵ月から、産後は子どもが乳児院に入れるようになるまで、子づれで軽い仕事ができるようにしたんです。お天気のよい日などは、おしめがズラーッと満艦飾でした。

武内　私のところでも、お産して三日目に仕事にでてきた人がいましたけど、どこでも

大なり小なり、ひさんなことがおきていたんです。

だから、全国婦人活動者会議で、この報告をきいて、よしやろうというので、中央でも労働省や厚生省と交渉するし、総評などにも応援してもらって、はじめて産後二週間の有給休暇をとったんです。それからも、「二週間たてばモッコをかつげというのか、日雇いは人間でないというのか」とつめより、有給休暇を三週間にさせ、出産手当もふやさせて、だんだん充実させていったんです。そのころには、私たちも年をとってきて、もう子どもを産まなくなっちゃってましたけどね。

横尾　お産のことでは、健康保険がきかなかったから、お金がなくて、ほんとうにこまりました。三〇〇〇円から五〇〇〇円くらいかかりましたから。それで婦人が中心になって、理解のある産婦人科のお医者さんに、組合が責任をもってお金を払うからと約束して、診てもらえるようにしました。私は現場の責任者でしたが、お産をして働きにでてきた人の毎日の賃金の中から五〇円ずつもらって、五〇〇円、一〇〇〇円とまとめて払いました。

あのころは、ケガをして医者に行っても、〝日雇いなんか指の一本くらい切っちまえばいいのに〟なんてバカにして、見習い看護婦に注射をうたせて、針をさしたまま用足しに行っちゃった医者もいましたしね。それで、日雇いでも安心して診てもらえる病院をつくろうとなって、みんなで建設資金をだしあって、診療所づくりに協力しました。

●子どもの成長とともに――保育から教育へ

司会　そうしたたたかいをふりかえってみて、大切だと思う点はどんなことですか。

大道　はじめのころは、子どものことが中心でしたけれど、わすれてはならないのは、保育所づくりも、子どもたちの大きなぎせいのうえにあったということです。京都でも、青空保育をやって、子どもがトロッコの下じきになって死んだり、御所の中にできた託児所でも、保母さんが一人しかいないから、池にはまって死んだ子がでたりしました。

それと自治体の協力です。とくに京都はニナ川民主府政でしたから、託児所の運動会にニナ川さんがきてはげましてくれたりしました。

武内　子どもを守るという母親の一念からでてくる要求をつかんでたちあがったということですね。だから、子どもの成長につれてたたかいも発展しました。

それと共闘です。

保育所がすんで学校に入るとなると、洋服もランドセルも買ってやれない。教科書も。それでまず、入学支度金をだしてくれと、市へ行って座りこんだり、あちこちの学校をまわって、入学後もランドセルを買えない子が何人いるかきいて、先生もいっしょにやってくださいとたのんだり、川崎の教組といっしょに交渉したり。

「この子が入学するのだ、本も買ってやれない、なんとかしてくれ」と、子どもをつれて交渉したら、いたたまれなくなって教育長が逃げだしたこともありました。こうして川崎市では一九五六（昭和三一）年、二年がかりでついに二〇〇〇円の支度金を市から「貸しつけ」というかたちでだしてもらいました。

教科書も給食費もつぎからつぎへとたたかったけど、大きなのは修学旅行費でした。「う

ちの子もいかれなかった」「うちの子も」とか、「うちもあきらめていたけど、お金をもっていく日になったら、子どもが泣きだしてね。カヤまで質にいれて、親せき中まわって、やっと行かせることができた」とかいう話がでて、京都への修学旅行費二三〇〇円をたたかいとったんです。この成果を全国婦人部長会議で発表したら、全国的な問題として文部省交渉をやろうとなり、日教組といっしょに文部省交渉をするなかで、川崎市と同じ基準で要求が通りました。中学を卒業したらすぐに社会に出て働かねばならない子どもたちに、一番の想い出になる修学旅行だけは、どの子にもやってやりたいと思ったものです。

横尾　教科書なんて、ほんとうに買えなかったんですものね。娘は小学校三年生になったくらいだと思いますが、となりの子の教科書をうつして勉強してたんですよ。それで、分会の婦人部長といっしょに、九つくらいの学校をまわって、先生にも協力してもらいながら、日雇い労働者の子どもがどのくらいいるかをしらべて助役さんと交渉したら、「そりゃたいへんだ」と、無償にしてくれたんです。

いまから考えて、大事だなと思うのは、あのころは、自分だけで何とかしようというふうには、まったく考えなかったことですね。「自分がこまっていれば、人もこまっている」と自然に考えたから、とにかくしらべて交渉しようとなったんです。

●だまっていたらなんにもくれない

武内　そうなのね。実際にこまっている人は失対の人だけじゃないから、保育所も失対の保育所から一般の保育所に発展させていったし、そういうなかで、ただこまっているか

ら保育所に入れるんだというのではなくて、子どもは社会の子だし、子どもの成長にとっても、そして婦人の解放にとっても、保育所問題はとても大切だという確信がうまれて、国へむけた運動も発展していくんですね。

伊藤　全日自労の運動、とくに婦人の運動は、婦人の権利を守り、母性を守るだけではなく、人間の生きるための基本的な運動だったと思うの。

山形でも、子持ちの母親を対象にした産児制限の講習をやったり、妊娠した子を産まない相談をしたり、託児所、保育園、教科書の無償支給、医療、くらし、生活保護と、全日自労の運動が地域にあたえた力はいろいろな面で大きかったと思います。

松沢　全日自労の運動で思うのは、だまっていたら、なんにもくれないってことですね。一つずつ一つずつ、くり返しくり返し、ねばりにねばってとってきたし、つくりだしてきたし、一つの要求がとれれば、また一歩高い要求に目をむけて結束してきたんですよね。

そういうたたかいの基礎にあったのは、戦争の中を生きぬいてきて、命の尊さを知り、助けあわなければ生きていけないことを知っていたからだと思うんです。そして、生きるために、子どもを育てるためにこそ、働いたし、たたかったんだし、人間としての当然の要求、当然の生き方をひたすら求めつづけたんだと思うんです。

たとえば、子どものことで、いろいろな制度をつくらせましたけど、ＰＴＡや授業参観日、入学式、卒業式にでられるようにしてほしいということでも、賃金を保障してほしいとか、ふだん着を着てくるように、ほかのお母さんに言ってほしいとか、日曜日にやって

ほしいとか、いろいろな方法で要求の実現をせまっているんですね。「仕事があるから行けない」なんて、あきらめないんですよね。

託児所のことにしても、大分などでは、日曜日も年末年始も働かせろと要求して、それをたたかいとるのとあわせて、日曜にあずかってもらえる託児所をつくらせ、そこに地域の子どもも入れるようにしたし、子どもが休むと、保母さんや学校の先生から「どうしましたか」って、組合に電話がかかってくるという信頼関係をつくっていきました。それはやっぱり、戦争で子どもをたくさん殺された、という無念さのなかから社会全体が協力しあって、子どもを守っていくんだという考え方があったからだと思うんです。

●どうするどうするとたたかいへ

司会　いま、当時の要求がどのような性質をもっていたかのお話がだされましたが、これを実現する運動をどうすすめたのか、その点で大切なことは何だったのか、ということですが。

菅原　運動をすすめていくうえで大切だと思ったのは、中央機関紙の役割です。私が中央の婦人部長になったのは、一九五六(昭和三一)年一〇月の第一一回大会でしたけど、本部へきても、なにをやっていいかわからない。それで、『婦人部ニュース』を毎月二回、ガリバン裏表で一部一円ということでだしはじめました。

男の人のなかには「うちは婦人部なんてないから、ニュースはいらない」という人もいて、「婦人部がないからつくってほしいの。だれでもいいから女の人によませて」とたのみました。そして、各県支部や婦人のなかまに、毎日五通くらい手紙をだしたんです。「子どもたちが心配なく学

婦人部ニュース
No.11
3月
MARCH
入学支度金を一人二千円
とぶ川崎のなかまたち
神奈川県支部婦人部長の報告から
学童服、ランドセルも
生保の差引きも、とり返す
婚姻基準というドスで
ダンピング人をおどす反省

校にいけるようにするにはどうしたらいいんだろうね」とか、私も悩んでいたことをかいて。それで、返事がくると、ニュースにのせて、また全国におくりかえしました。

兵庫の尼崎の婦人部長さんは、こんなことをかいてくれました。

「子どもが『三八〇円くれ』っていうので『どうするの』ってきいたら、『学校でトレーパンを買えっていわれた』っていうんです。『ずいぶん高いパンだね』ときいたら、トレーニングパンツのことでした。こんなちょうしで、私は、書くことも言うこともわからない人間ですけれど、子どもから要求されたことを、どうしよう、どうしようと、なかまに相談する。そのことが組織づくりになるんだということが、最近わかってきました」

それで、こんなことならやれるって、各分会で婦人部らしいものができていくんです。

武内　『自労婦人しんぶん』は、労働組合婦人部の機関紙としては、おそらく初めてのものだと思いますし、活版になってからも、字を大きくするなど、〝じかたび〟に統合されるまで、その一歩先を行って、機関紙協会でも一等をもらいました。あのころは、どこそこで修学旅行費をとったぞと機関紙にのれば、ワーっと全国にひろがりました。

伊藤　尼崎の婦人部長さんが「どうしようどうしよう」となかまと相談したってお話ですけど、山形では一九五四（昭和二九）年に「検便拒否闘争」っていうのがあったのね。

六〇人くらいの現場で、大腸炎がでて、一〇人、二〇人と感染していったの。だけど、仕事を休んだら生活ができないから、はうようにしても伝票を切りにきて、現場の木の下に、むしろをしいて休んでいるのね。

そのことが保健所の耳に入って、強制的に検便をやるってことになったの。結果がはっきりでたら就労できなくなるから、「どうするどうする」ってやって、とにかく保健所をおいかえしたんだけど、またつぎの日もくるの。それでまた、「どうする」ってやっていたら、市と職安と福祉事務所と保健所もどうしようと会議をして、市独自の法外援護をくんで、休んだ分の賃金は市が保障するってことになったの。

それならというので検便をうけたんですけど、このとき、女の人が中心になって「どうしようどうしよう」とやったことが、「みんなで話しあって、みんなで決めて、みんなで行動する」大もとの力になったように思いますね。

大道　そういうたたかいが基礎になって婦人部が確立していくわけですが、中央の婦人部をつくるというのは、やっぱりたいへんでした。私が一九五三年の第八回大会にでたら、女の代議員はたった一人なんですね。それで「なにごとか」と発言したのがきっかけで、婦人が一度あつまりましょうとなって、その年の一二月四日に全国日雇婦人協議会を結成するんです。これは、つきそい看護婦や競輪、競馬の婦人もふくめたもので、武内さんが会長になりました。

そして、この日雇婦人協議会を強化するためにも、全日自労の婦人部を確立することが重要だというので、一二月六日に王子の宿舎で全日自労婦人部を確立し、婦人部長に渋谷の保科とくえさんをえらんだんです。もっとも、そのころは、いまみたいに組織的にきっちりしたものじゃなかったし、ほんとうに確立するのはもっとあとになりますね。

二　おっぱいの連帯から世界の平和が

一九五一（昭和二六）年九月、日本はサンフランシスコ「平和」条約に調印、同時に、日米安全保障条約をむすびました。日本は、アメリカの目下の同盟者として、独占資本主義を復活・強化し、反共戦争とアジア諸国への帝国主義的進出をおこなう路線を確立しました。再軍備がすすめられ、破壊活動防止法制定（一九五二年）、全日自労の前身である全日土建の組合員も三二六人が検挙された血のメーデー事件（同年）、「教え子をふたたび戦場に送るな」とちかった教師たちへの勤務評定（一九五七～八年）、警察官の権限を大はばに拡大する警察官職務執行法改正案（警職法）など、治安対策の強化がはかられていきました。また石炭から石油へと、アメリカにつきしたがうエネルギー政策をとった政府・独占資本は、炭鉱労働者一〇万人首切りの突破口として、三池の炭鉱労働者一二七八人の指名解雇をおしつけてきました。そして、一九六〇年には、アメリカの戦略体制をいっそう強め、日本の再軍備をいっそうすすめる日米安保条約改定が強行されます。こうした反動勢力のうごきにたいし、そのほとんどが戦争被害者であった全日自労の婦人たちは、どのようにたちあがったのでしょうか。

●「人殺し」の手伝いはダメだ――朝鮮戦争反対

司会　一九五〇（昭和二五）年の朝鮮戦争のころは、全日土建の機関紙『じかたび』も

押収され、責任者が逮捕されるなど、警察の弾圧もずいぶんはげしかったと思いますが、各地でどんなたたかいをすすめましたか。

菅原　朝鮮戦争が始まって一年くらいしたときだと思いますが、朝早く、見なれないトラックに、運転手と、ごっつい男が二～三人のって安定所の前にきました。

そのころ、失業者は二〇〇〇人くらいいて、アブレも多かったし、失対賃金が二二五円なのに、五〇〇円だすというから、けんかごしでトラックにのりこむ人もいました。

運転手に、なんの仕事だときいたら、「弾丸はこびだ」というので、どこへもってくんだってきいたら、「おれらも知らないけど、港へもってくんだ」って。それで、「じょうだんじゃない、人殺しの手つだいはぜったいだめだ」といったら、運転手は「何人でもつれていかなければ、おれの仕事がなくなる。おれの家でも、子どもが腹をすかしてまってるんだ」というの。

それで、「あんただって日本人だろ、私たちだって、たった二二五円もらって一二日しか働けないのに、戦争はいやだっていってるんだ。子どもも女房もいるというなら、わかってくれよ。どうしても行くというなら、私たちをひいてから行け」っていって、よんできた若い人たちといっしょになって、トラックのまわりをとりかこんだの。

トラックの上には、もう十何人かのっていたけど、この人たちにも「あんたたち人殺しの手つだいをするのか」って説得してね。そうしたら、「女のくせに、だまってろ」っていうわけ。それで、「女だって全日土建だ」といってやったら、こんどは、「なんだ日雇いの

くせに」というから、「おまえだって日雇いじゃないか、日雇いだからこそ仕事にいこうと思ったんだろ、人殺しの手つだいまでして、かあちゃんがよろこぶと思うか、たのむよ、おりてくれよ」といったら、「オ、やめよ、女の人がこれだけいうんだから」と、おりてくれたの。ほんとうにうれしかった。

トラックの運転手の方も「そこまでいわれたんじゃ、きょうはやめるよ」といったので、「じゃ、あしたもくるのか」ときいたら、「いやもうこない」といって、ひきかえしてくれました。

それで、「よかったね、よかったね」といっていたら、職安の職員が「なんでじゃましたんだ」って文句をつけてきたの。それでまた、「じょうだんじゃない、朝鮮の人たちは、これまでも何十年と苦しめられてきたのに、もっとひどいめにあわせようというのか、食うためには人殺しをしてもいいというのか、こんどああいうのがきたら、ぜったいに追いかえせ」といってやったの。

あくる日は、もっと早く行って見はっていましたけど、トラックはきませんでした。

あのころの職安には私服警官が年中きてましたし、雨がふりだすと、仕事につけなくて騒ぐという口実で、ガッガッガッという靴音を鳴らした警官がぞろぞろやってきました。「ほら逃げろ」と、かばいあいながら組合事務所にあつまり、「なぜこんなに失業者が多いのか」「なぜこんなに生活が苦しいのか」「生活できるようにするためにはどうしたらよいのか」と、よく話しあったものでした。

おどろいてにげだした血のメーデー

二十七年のメーデーは、日比谷で解散する予定でしたが、途中で人民広場へいくことになり、婦人も広場でいっぱくして、ごはんをたべようとしていました。そこへさいるいだんがとび、ピストルの音がきこえ警官があわただしくかけまわりだし、看護婦さんがケガ人を運んでいるので、おどろいてにげだしました。

いま思い出すと、私服がそうとうデモのなかにはいりこんでいたようです。

神田橋でも一時は幹部がつかまって、組合がガチャガチャになったことでした。

（『じかたび』一九六六年一月三日、婦人座談会より）

大道　京都では、「弾丸はこび」のようなことはなかったように思います。そんなことがあったらやっつけてやろうと目を光らせていましたけど、気がつきませんでしたからね。

じかたび
職人と自由労働者と失業者の新聞
ピストルの弾丸にぱけるな地方税を払うな
ピストルで射たれた仲間を運び去る
警官、ピストルを発射
倒れたままで生死不明
血に狂うコン棒
平和のための仕事よこせ！

朝鮮戦争時、「じかたび」も弾圧され、発行禁止になった

ただ、警官隊とは、よくぶつかりました。一九五〇年の一二月には、朝鮮戦争に反対し、〝日雇いにも人並みの正月をさせよ〟と数千人がデモをし、一〇〇人の逮捕者をだしました。翌年七月にはお盆手当一七五〇円をとり、一二月には一万円の越年要求をだしました。全京都の日雇労働者一万人が初めて二日間のストをうち、八〇〇〇人が徹夜で市役所と府庁をとりまき、三〇〇〇人の警官とむかいあって、百数十人の負傷者をだし、徹底的な弾圧をうけました。このときの中心も婦人です。「子どもに新しい下駄と足袋を、腹いっぱい餅を」「昼はまぼろし夜は夢、金一万円」と、それぞれ、自分でつくったスローガンのたすきをかけて座りこんだのです。

●運動の中で「戦争反対」を知る

横尾　飯田橋のあたりでも、弾丸はこびがどうのという話はきいたことがありませんね。もっとも、そのころの私は、「朝鮮は悪いんだから、やられるのがあたりまえだ」と考えていました。とにかく私は、国防婦人会で教育されたせいか、戦争で家を焼かれ、機銃掃射までうけて、娘といっしょに死ぬ思いまでしたのに、自分はいつ死んでもいい、死ぬならアメリカ兵を一人でも二人でも殺してからだって、いきがっていたし、戦後の苦しい生活も日本が敗けたからだ、勝っていれば……というくやしさしか感じませんでした。選挙でも、政党なんて何も知らなくて、仕事先でよくお茶菓子をだしてくれるっていうんで、自民党の議員をかついだこともあったし、共産党が「地下にもぐった」という話をきいて、どうやって地面の下にもぐったんだろうと考えてたくらいですからね。

だから、戦争でひどいめにあったからといっても、「戦争反対」とはならなかったのね。やっぱり組合で運動し、母親大会にずっとでてくるなかで、あの戦争がなぜおこったのかを知り、安保条約の勉強もさせてもらって、これが、アメリカのいいなりになって、また戦争をやろうとするものだということがわかってきたんです。

島田　私も、朝鮮戦争はよその国のことだとしか考えていませんでした。私たち一家は、敗戦後、一年ちょっとハルピンにのこされたとき、家が満州鉄道のすぐ前だったこともあって、何回も略奪にあいましたし、となりの娘さんが殺されたのも目撃しました。奥地から、着のみ着のままでにげてきて、日本人小学校に避難していた人たちが、どんどん餓死して、校庭にうめられていたんですけど、雨のふった日なんか、小学校の校庭のどろがくずれて、山とつまれた死体の足や手がニュッとつきでているんです。引きあげてくるときも、とび乗ろうとした貨車から子どもがずり落ちて、「止めてください、止めてください、あの子がはなれたらダメー」と、みんなも叫ぶし、親はきちがいのようになって叫んでいるのに、どんどんスピードがでて、「おかあちゃーん、おかあちゃーん」と泣いている子どものすがたが小さくなっていくのを見ているんです。三つか四つの子でした。

いま、中国残留孤児のテレビなんかをみると、自民党政府はこれまで何をしていたのかと、身体が震えるほどハラがたつんですけど、その当時は、戦争っていうのは無情なものだと感じていたし、食べるものもない苦労の連続だったのに、朝鮮戦争で日本の景気がよくなれば、なんていうふうに考えていたんですね。

それが少し変わり始めるのは、失対に入った年の暮れだと思います。手当をくださいって、大牟田市役所の中に、お母さんたちが子どもをおぶって座りこんだとき、警官隊がひきずりだそうとするので、私は隊長のような大男の胸にむしゃぶりついて、「たった三〇〇円の手当をくださいというのがなぜ悪いのか！　私たちの子どもにはお正月をさせることもできないのか！」って、わんわん泣き叫んだんです。

私は、この経験と、三池闘争のとき暴力団の援護をしている警官のすがたをまのあたりにみて、それまでの考えが変わり、母親大会で胸が焼かれるような思いをさせられてから、自分がどう生きなきゃならないかってことをつかんだような気がしますね。

●被爆者＝母の訴えに学ぶ

司会　その母親大会というのは？

島田　あれは第二回の日本母親大会でしたが、広島の被爆者の婦人がこう訴えたんです。「ちょうど娘におっぱいをのませようとして、背中からパッと閃光をうけた私は、とっさに子どもにおおいかぶさって、娘を助けました。ところがその話を大きくなった娘にしたとき、娘に『そんなことより、お母さんはなぜ戦争に反対しなかったのか』っていわれました。私は五寸クギをつきさされたような思いでした。そして、母親大会にもでてきて訴えることが娘のためでも、自分のためでもあり、多くの被爆者のためでもあると思いました」って。

私はこのとき、どんなことがあっても、戦争に反対してたたかいぬこう、どんなことが

あっても戦争と失業と貧乏に反対する全日自労を離れまいと心にきめたのです。

浜本　私も娘時代は女子挺身隊で竹ヤリをもって走りまわっていたし、天皇は生き神様だと思っていましたし、樺太の真岡では、艦砲射撃で海が血で真っ赤になるくらいの死人がでたなかを逃げまわった体験をしていますから、そのころは「戦争反対」というよりソ連への憎しみばかりでした。

でも、いくら働いたって一八〇円の賃金では貧乏からぬけだせないし、何かがくるっていると思いはじめて、だんだん、全日自労の「失業と貧乏と戦争反対」の綱領が正しいとわかってくるんです。

●母親大会から世界へ――おっぱいの連帯

司会　いまもお話にでましたが、母親大会は「生命を生みだす母親は、生命を育て、生命をまもることをのぞみます」というスローガンにもあらわれているように、お母さんたちの子どもを守るねがいを、戦争に反対し、平和を守るたたかいにつなげていったという大きな意味をもっているように思いますが、全日自労はこのなかでどんな役割をはたしましたか。一九五五（昭和三〇）年七月にスイスのローザンヌでひらかれた第一回世界母親大会には菅原さんが出席されたんですね。

菅原　ええ。六月に第一回の日本母親大会が東京でひらかれたとき、世界中の母親が力をあわせ、二度と戦争をおこさないために、日本からも母親の代表をおくりだそうときめて、神奈川からは私がすいせんされました。

ところが、費用が一人八〇万円いるというので、びっくりしてしまいました。大会は七月だから、六月末までに最低三〇万円を中央実行委員会にとどけなければ、代表とりけしになるというのです。「全日自労は無理だろうな」なんていう陰口も耳に入りました。

実行委員会が神奈川県でも鶴見でもいそいでつくられて、いつもよっぱらって、ぐでんぐでんになってるような男の人までが、「禁酒」とかいた半紙を組合事務所にはりだして「あいつらのハナをあかしてやる、いくら貧乏したって、やるときはやるんだ」といってカンパあつめに走りまわってくれました。学校の先生も街頭に立ってカンパをあつめてくれました。そうして、わずか一週間で三〇万円があつまり、一〇円玉、五円玉がぎっしりつまったボストンバッグをとどけたんです。バッグをあけたとたんに机の上はいっぱいになり、「さすがですね」といわれました。最終的には一一七万円のカンパがあつまりました。

武内　あのとき神奈川では、県教組の婦人部長をおくろうという話があったんですけど、先生たちは「母親の代表なんだから、私たちの出る幕じゃない、貧乏ななかを子どもをりっぱに育ててきた自労の菅原さんこそ、代表としてふさわしい」

一九五六年、第一回世界婦人労働者会議から帰った高さん

といってくれ、カンパもほんとうによくやってくれました。全日自労の婦人も、外でカンパ活動をやったことなんてなかったんですが、みんな袋をもって、町中歩きまわりました。これが、自分の体を外にぶつける運動の始まりだったし、それから運動が変わってくるんですね。

菅原　羽田での見おくりもすごくて、鶴見分会だけでもバス一〇台をかしきってくれました。二七〇円の賃金から一〇〇円ずつだしてきてくれたんです。

代表団は河崎なつさんが団長で、羽仁説子さんや丸岡秀子さんなど有名な人ばかりで、私なんかが行ってどうすればいいのかと心配だったんですけど、むこうでは、「子どもが何人だ」ときかれて「五人いる」と答えてから気もちがすっかりとけあって、二、三日もすると、私が日本人だということをわすれちゃうくらい親しみを感じました。

大道　一〇月の大会で菅原さんが「外国人もおっぱいをのませてるのを見て、ああ、いっしょだなあと思いました」と報告したのをきいて、ここが急所だなと思いましたよ。

菅原　私たちも砂利の上に腰かけて、おっぱいをのませていたけど、現地の人が子どもづれできていて、おっぱいをのませるのをみて、肌の色が黒かろうと白かろうと黄色だろうとみんな同じだなあと、よけい親しくなりましたね。

会議では、長崎の代表が原爆のことなど話しましたが、インドの人が「女の人じゃなきゃ、ほんとのことを言わない。地球には女が半分いるんだから、女が平和を本当にかんがえていったら、地球上から戦争をなくすことができる」と言ったのをきいて、日本にかえ

ってからいそがしくなるなと感じました。それから二年間に全国で二〇〇〇回の報告会をひらくんですけど、私も北海道のほかは全部行きました。

大道　翌年には世界労連のよびかけで第一回世界婦人労働者会議がハンガリーのブダペストでひらかれ、全日自労から、大阪の高静子さんと私とが参加しました。このときも、全日自労から行くなんて思ってもみなかったんですけど、正式にきまったら、私の西陣分会だけでも、のべ二〇〇〇人が動いてくれて、一〇日間で九八万円もあつまったんです。

会議では「同一労働同一賃金」「平和のための統一闘争」「労働組合の各級機関に婦人労働者を」ということがきめられました。生まれてはじめて、地球の裏側の社会主義国を自分の目で見、肌で感じたのですから、おどろきの連続でした。

日本では、まだ、生理休暇とお茶くみ問題などが課題になっていたときで、一五〇〇回におよぶ報告会をつうじて、この決定が浸透していきました。

伊藤　私は一九六三年にソ連のモスクワでひらかれた第五回世界婦人大会に行ったのですが、むこうでは大きな荷物をもって歩いていると、知らない人が「もってあげよう」って声をかけてくるんです。はじめ、警戒したんですけど、通訳の人も「もってもらいなさいよ」というの。忘れものも必ずでてきたし、バス代も、うしろの降り口にお金をいれるだけなんだけど、運転手さんにきいたら「みんな信用できる」っていうの。

こんなに人間性がちがうのか、社会のしくみの中で人間性もつくられてくるっていうのはほんとうだなと学ばせられました。

武内　私は一九六四年にルーマニアのブカレストでひらかれた世界労連の第二回婦人労働者会議に行ったあと、中国を一ヵ月くらいまわったんですけど、武器をとって戦うか、だまって飢え死にするかしかなかった農民のギリギリの要求をとらえて立ちあがらせた毛沢東の指導は勉強になりました。でも、社会主義の建設という点では問題が多くて、どうなのかな、といいながら日本にかえってきました。

司会　国際会議に代表をおくりつづけたことは、どういう力となりましたか。

大道　日本では、世界母親大会のときから三十何年間、ずっと母親大会をつづけていますし、地域にもひろがりました。

母親大会を前後して「母と女教師の会」の運動もすすむんですが、母親大会は、先生であろうと日雇いであろうと、同じ母親だという点で、民主的で魅力のある運動だったし、私たちが大きな力をそそいで前進させていく任務があったと思うんです。

だから、「いつでもだれでも、買い物かごさげて話しあいのできる母親大会」「茶ばおりの母親大会からエプロンがけの母親大会へ」という方針は全日自労がだしたと思うの。

世界婦人労働者会議も、日本での働く婦人の集会につながり、それが毎年つみかさねられてきました。これが働く婦人に自信をもたせ、日本の労働運動の底力になっていくんです。

とくに全日自労では婦人部をつくること、婦人を役員にばってきすること、という世婦労会議の決定をそっせんしてじっせんしました。

伊藤　母親運動は、母と子の生活を守ることを基礎にして運動してきた私たちの目を、もっと横にひらかせてくれました。つまり、階級性のようなものを自分たちのものとしてきたんですね。

それと同じように、ただ自分の子どものしあわせと平和を望んでいた地域のお母さんたちを一歩一歩高める役割もはたしてきたと思いますね。

●行動しながらめざめる

武田　これは失敗談ですが、何回目かの母親大会に高知から一三人の代表で参加したときのことです。みんな東京に出てくるのもはじめてで、東京では、ていねいなことばをつかわなければいけない、なんでも「お」をつけなければいけないって思ってたわけです。

平和の大事さを胸をはって訴えながらデモをして、つかれきって本郷の旅館へつきました。みんな、早く床をしいてもらって横になりたい。それで、団長の独身の先生が宿の女の子に「おトコ一三人分、すぐにおねがいします」と言ったんです。そしたら、一五、六歳くらいの子でしたけど、目を丸くしてるの。私は小学校一年の姪をつれてたから、「この子の分はいいです」と言ったら、びっくりした顔のまま、奥へひっこんじゃって、こんどは、おかみさんがでてきたんです。

「まあいらっしゃいませ、お国はどちらですか」なんて聞くから、そんなことはどうでもいい、早くふとんをしいてくれないか、と思いながら、「高知です」と答えたら、「そうですか、わかりました。高知は情熱の国でございますものねえー。でも、一三人はすぐまに

あいません、一人か二人ならなんとかできますが……」というんです。こっちはキョトンとしてしまったんですが、須崎からきた自労の代表は怒って、「旅館にふとんがないとはきいたことがない」とどなったんです。そしたら、おかみさん、「えっ、おふとんですか？　男子のことじゃないんですか」。それでもう、団長の先生は、顔をまっかにしてね。高知へかえっても、報告はその話ばかりでしたけど、そのくらい、なんにも知らない母親たちが行動したんだし、一歩一歩めざめていったってことですよね。

●親への攻撃とうけとめ――勤評闘争

司会　そうしてめざめていくなかで、勤評、警職法、安保、それに「戦争と失業に反対する大行進」（一九五九年と六一年）などのとりくみで、民主勢力の共闘にも大きな役割をはたすことになりますね。

武田　先生への勤務評定の攻撃ですが、高知ではさっきもいったように、学校の先生が私たちの組合をつくってくれたようなものですから、私たちの親への攻撃だという感じがしましたね。

執行部の婦人たちは「みんな聞いてや、モチ代をもらいとうて、県庁へ押しかけたとき、一番先に応援してくれたのはだれぞ。それは先生たちやないか。朝までいっしょに座りこんで、組合が大切なことをおしえてくれたのは先生や。その先生たちが、私たちの子どもを落ちこぼさないために、民主教育を守ろうとたたかっているのが勤評反対や。子どもに聞いてみいや。弁当の持てない子にパンをくれた先生、わすれたというウソをいって、給

食費をもっていけないときに、そっとたてかえてくれた先生、良い先生は、みんな勤評に反対しているのや。教科書をもってこない子がいると、勉強のさまたげや、おまえは休め、と差別する先生は勤評賛成や。自分だけ良い点を取りとうて、上向いてペコペコする先生に、子どもの教育、まかせられるか」って訴えました。みんな泣いて聞いてくれました。

そして警職法闘争です。このたたかいで、世の中のしくみがわかり、警察がだれの側に立っているのかがわかってきました。

ですから、安保闘争では、現場要求もかかげながら、ストライキでたたかうところまで私たちはめざめてきました。

●安保と三池は同じ根っこ

島田　大牟田では、安保と三池は同じ根っこからでてきているし、三池炭鉱で大量の首切りがでてきたときには、つぎは失対の首切りがくるぞ、と話しあいました。炭鉱からも失対からも追いだし、独占資本のつごうのいい地域で、うんと低賃金で働かせようという政策があるんだってことですね。

それで、全日自労も三池闘争を全力で支援したし、私たち婦人もリヤカーにおにぎりをいっぱいのせて、子どもにもハチマキをさせて、警官隊の壁の中を通って座りこみの支援に行きました。

三池の代表を母親大会に送ろうというので、「それどころじゃない」と、とりあってくれなかった三池労組に七回くらい足をはこんで、「女は女の立場で、こまかな生活実態を訴え

ていくなかで、労働者どうし手をつないでいくことができるんじゃないか」とおねがいして、やっと承知していただいたってこともありました。

浜本　三池へは夕張からも応援にいきましたけど、長いこと行ったきりだから、その留守宅をはげまそうと、「炭鉱を守る会」をつくりました。一人一ヵ月五円の会費でね。こういう支えあいがあったんですよね。

横尾　東京では安保のときは、ほんとに毎日毎晩、みんなして国会へ行って、フランスデモをしました。警官がけっとばしてくるから、「なによ、あんたの母親のようなものをけとばすのか」とやりかえしたりしてね。

子どもが病気だったこともあって、再婚した亭主から「表の平和もいいけど、家の平和はどうなるんだ」なんて文句をいわれましたけど、家の平和は表の平和があってこそ、ということがもうイヤというほどわかっていましたから、家と病院と国会と職場とをかけずりまわってがんばりました。

●戦争と失業に反対する大行進

伊藤　戦争と失業に反対する大行進（一八四頁写真参照）ですが、行進にあわせて、各団体や地区労などもいっしょになって集会をひらきましたし、ほんとうに幅ひろい運動になって、社会保障闘争も発展させるきっかけになりましたね。

大道　京都でも大動員がかかりました。京都の西のはてで大阪から旗をバトンタッチし、京都市役所前で大集会をして、滋賀県の大津市まで歩きとおしました。地下足袋をはいて

貯金箱のベトナム人形を一万個以上売った

いましたが、足の裏がはれました。あの行進などをつうじて、婦人が統一してたたかう婦人月間運動の中心スローガンも、一九六二年、六三年は「戦争と失業と貧乏をなくすために、すべての婦人は手をつなぎ、安保体制をくずしましょう」「婦人の働く権利の確立と、同一労働・同一賃金をかちとりましょう」「世界の婦人と手をつなぎ、平和共存・民族独立・完全軍縮をかちとりましょう」と決められたのです。

●弁当箱わすれてもベトナムカンパわすれるな

司会　ちょっと話は先にすすみますが、一九六五（昭和四〇）年ころから米軍による北ベトナム爆撃が本格化します。これにたいし、全民主勢力が共闘して、ベトナム侵略戦争反対、ベトナム人民支援の運動をすすめますが、このときの運動はどんなでしたか。

大道　あのとき、各県、各分会で「一日一円カンパ」「一日分の賃金」などの運動にとりくみ、婦人部は独自に「ベトナム母と子保健センター設立」募金にとりくみました。貯金

箱のベトナム人形も一万個以上売りました。

新本　新居浜では、ベトナム人民支援で、五円でも一〇円でもあつめる方法はないかねと職場から意見がでて、婦人部大会をひらいたんです。そこで、毎日一円募金をしようと提案したら、六五人のうち二人が反対でした。

一人は、孫が生まれたんだけど、その子のお母さんが死んでしまい、自分が乳児院へつれていかなければならないから、毎日だすと約束してもできない、という理由だったので、かためていれてもらうことにしました。もう一人も、必要性はわかるが、もっと地域からやった方がよいという意見で、ほんとうは賛成でした。

そして執行部にはかって、一円募金を始めるんですけど、最初、つらかったのは、私が箱をもって現場をまわるたびに、「おまえらのようなものに一〇円入れてやるより、パン一つ買った方がなんぼいいかわからん」「外国の方にまで手をのばす力がどこにあるのか」って、男の人にいわれたことです。私は、なるべく腹をたてないようにして、「どこの国の人だろうと、命のとうとさはおなじ。こまった国を助けあって、手をつないでいきましょう、という募金の始まりじゃから、ひとついれてや」とたのみました。

そういうことが二年つづきましたが、さいごは、「しょうちゅうのんだおっりじゃ」とか「たばこのおつりじゃ」とかいって、男の人の方が先に募金箱にいれてくれるようになりました。そのときが一番うれしかったですね。

大道　「弁当箱わすれても、ベトナムカンパをわすれるな」という名スローガンは、新

本さんがつくったんでしたね。

新本　ええ、「弁当箱わすれても、ベトナムの箱わすれるな」っていったのが、しっかり合いことばになって。当番は一ヵ月連続して、家から職安前に募金箱をもってきては、一円カンパをあつめるわけね。だから、箱をわすれるといれてもらえないでしょ。

そのころもまた、一つ話があるんですけど、私がやるのと、ほかの人がやるのとでは一〇〇〇円からちがってくるの。どうしてですかってきかれてね。たいていの人は「ここに募金箱おいときますから、おねがいします」というだけなんだけど、私はまず監督さんからいれてもらい、一人ひとりのところをもって歩くの。一〇〇円とか五〇円とかの人があると、「まあこんなにたくさんありがとう」というの。そうすると、赤い玉をだそうとしていたとなりの人も、白い玉になるんですね。この募金は、国際連帯と原水爆禁止・被爆者援護の募金として、二〇年間つづけています。

大道　私は一九七二（昭和四七）年、まだアメリカの爆撃がはげしいとき、招待されてベトナムに行きました。

あのとき、国労の代表が米軍のタンク車を阻止した報告をしたら、ウワーッとなって、胴上げですよ。私たちもやってるのにと思ってざんねんでしたけど、石油を送らせないことで、きょうは何人助かったと、ベトナムでは骨身にしみて感じるんですね。

あのとき、カンパも大事だけど、日本でアメリカの手をしばり、安保条約を廃棄して、民族自決をたたかいとることが一番大事なことだと思いました。

三　苦労のかずじゃ負けやせぬ

――失対打切り反対のたたかい

安保闘争後、岸内閣のあとをうけて成立した池田内閣は、新安保条約のもとでの新たな日米協力によって、〝高度経済成長〟と、帝国主義復活をめざしました。このために、統一行動を発展させてきた労働運動に分裂のクサビをうちこみつつ、〝労働力不足〟を宣伝し、〝労働力流動化政策〟〝積極的労働力政策〟の名でよばれる雇用政策をすすめました。これは、失業者を拡散させて失業反対闘争をおこさせないようにするとともに、独占資本が支配する「重要産業」へ大量の若い労働者をかこいこみ、中高年齢労働者を追いだして低賃金労働者として再編成しようとするものでした。そして失対事業にたいしても、全面的なうちきりの攻撃がかけられてきました。

政府は治安対策と低賃金体制強化などのために失対事業をつくりましたが、ここに労働組合ができ、切実な要求をかかげて、どんな弾圧、分裂策動にもまけないでたたかってきた結果、失対事業の就労日数は月に二二日にふえ、賃金も自治体からの手当などをふくめると、必ずしも地域での最低ではなくなり、逆に失対賃金が中小企業や臨時工などの賃上げに役立つようになってきました。しかも、一九六一（昭和三六）年ころには三五万人となった失対労働者のうち、全日自労には二二、三万人が結集、労働者階級のたたかいをはじめ、地域のさまざまな民主運動、平和運動に重要な役割を果たすようになっていました。

そこで、政府・独占資本は、一九六二（昭和三七）年、失対事業の全面うちきり構想（①失対

事業の全面うちきり②体力のある者は民間へ③老人や婦人は生活保護へ）をだしてきました。

これにたいし全日自労は、失対うちきりが日本の軍国主義復活強化の全政策の一環であることを明らかにし、失対うちきり反対闘争を地域での一万円以下の賃金をなくす闘争、臨時工や社外工の闘争、社会保障の闘争、失業者の闘争などとむすびつけながら、社会党、共産党をはじめ、安保闘争以来の大きな共闘、統一行動を組織してたたかい、失対二法（職業安定法、緊急失業対策法）の改悪が国会で審議された一九六三（昭和三八）年五、六月には日々の賃金からつみたてた五億円の闘争資金をつぎこみ、連日一万人動員をかさね、二二日間も国会をストップさせる大闘争をくんで、はじめにだされた法案そのものからは大きな後退をかちとりました。

●地元では〝仕事不足〟が深刻に

司会　失対うちきりがだされてきた一九六二、三年というのは、池田内閣のもとで「高度経済成長」政策が始まったころですが、当時の生活というのはどんなふうでしたか。

大道　そのころも、炭鉱地帯は失業者でいっぱいでしたし、大都市でも、防空壕や戦災バラックから出られずに、戦争のいたでからたちなおれない多くの人たちがいましたね。運よく大工場の臨時工や下請け会社に入っても、不況になるとすぐ首をきられて、また失対にもどってくるという状況でした。

武田　高知でも若い人は都会へもっていかれました。しかし、その子たちも、満足に食べられるような賃金はもらえません。まして、子どもが四人も五人もいて、病気の亭主を

かかえているような婦人に、まともな職があるわけがありませんでした。だから、職安に「中高年の求人票をだしてみよ」というと、こまりはてていましたね。

島田　〝労働力不足〟の時代だとか、〝金の卵〟だとかいわれて、中学卒の子が東京や大阪に集団就職していきました。だけど、中学卒じゃ地元ではとても仕事がなかったんです。大牟田あたりでは〝労働力不足〟どころか、〝仕事不足〟がますます深刻になっていました。でも、とにかく口べらししなきゃならないから、一日も早く働かせようというので、中学をでると、みんな県外へ就職させなければならなかったのです。だから、あのころ、婦人部が中心になって「就職子弟をはげます会」を始めました。毎年つづき、親子で一〇〇人くらいあつまったこともありました。委員長から情勢を話してもらい、職場へ出る心がまえと、就職先にある全日自労の支部の住所をおしえて、記念品をおくりました。

●集団就職――三〇年たって思うこと

松沢　そのことについては長崎の権藤キクヱさんからも手紙がきてるんです。

「経済成長につれて、長崎県は毎年、中学卒業の子どもたちを阪神、名古屋に送りだしました。この集団就職について、〝ボストンバッグ・ダスターコート闘争〟というのがありました。そのころの初任給は四八〇〇円くらいだったと思いますが、福祉事務所から三万円ほどとって、子どもたちの身なりをととのえてやったんです。就職後の労働条件や労働基準法のあらましをリーフレットにしたり、全日自労の組合事務所の所在地をおしえておいたりしました。このころの母親大会は、高校全入一色で、集団就職の子のことを提起して

も、大会の運動にはなりませんでした。……高度経済成長期の長崎県の労働政策は、広域紹介、県外就職一本やりだったし、私たちにも、それにのらなくてはならない生活の事情がありました。しかし、あれから三〇年たったいま、どんな結果になったか。一人ぐらし、夫婦二人ぐらしのなかまがどんなに多いか、実態調査をしてみて、あらためて知らされました。中学卒で苦労して働き、世帯をもち、孫を育てている子に、いまになって、めんどうみてくれとはいえないし、子どもも親をみる力はありません。……」

そして権藤さんは、あのとき婦人部が県外就職にあたっての条件を少しでもよくするために、あらんかぎりがんばったけれども、いまからふりかえってみて、これからのたたかいを考えるとき、自民党の過疎政策と対決し、親子がいっしょに働き、生活できるような町づくり、仕事よこせ、仕事おこし闘争に目をむけていくことが必要なんじゃないかと話されていました。

武内　そのころ失対をやめたなかまたちがつくづく言ってたのは、「失対にいたあいだは組織をもって、めざめてたたかえて、しあわせだった。民間では、みんな何も知らないで税金に苦しめられ、貧乏にあえいでいても何も言えない。たたかうことを知らない。全日自労のなかまが、もっともっと地域の人たちにおしえてほしい」ってことなんですね。

こういう要求にどれだけこたえられたかわからないし、「町づくり」のようなことを意識していたわけじゃないけれど、私たちは、失対とその賃金は日本の最低生活と最低賃金を支える役割をはたしているし、そういう人たちの生活を守り、労働条件をよくするために

も、失対事業のうちきりをゆるしてはならないんだとたちあがったわけですね。

●生きるために署名を、募金を

司会　どんなたたかいをくりひろげたのですか。

横尾　失対の全面うちきりをやめさせる以外に、私たちが生きのこる道はなかったから一人のこらず真剣にたちあがりました。

一〇〇〇万署名も、みんな、いつでも持ってあるき、目標をやりきるために、日比谷公園、上野公園、駅頭など、人のあつまるところへはどこへでもでかけていって訴えました。お風呂屋さんの前に一人で立って署名してもらう人もいました。

国会には、安保のときと同じように毎日毎日行って徹夜をしました。きたないかっこうで近くの学校の前をぞろぞろ通るものだから、子どもたちから〝乞食の行列〟といわれましたが、たしかにそう見えるだろうなと思って、ちっともハラがたたなかったくらい必死でした。

武田　高知でも全県的に署名をあつめました。学校の先生、民生委員、お店など、子どもと生活のつながりのあるところへは全部行きましたね。

浜本　夕張でも、あのときから、署名をあつめること、お金をあつめることが始まりました。お金のことでは、物資活動をやって、失対うちきり反対と書いたシールをはったマッチやワカメなどを買ってもらったんですが、これは、字を書くこと、読むこと、帳面をつけること、仕入れのこと、人に接することなどをおぼえさせてくれました。

島田　でも、お金あつめはたいへんでしたよね。商店街なんかに何回もおねがいに行くもんだから、「またか」と水をひっかけられたこともありました。でも、お米のひとにぎりカンパなどで支援してくれた人たちもたくさんいました。

浜本　北海道の婦人部としては、一九六三（昭和三八）年の三月に「失業と貧乏をなくす母と子の全道集会」（一二、一二四頁写真参照）を札幌の小学校でひらきました。とても寒い会場でしたが、私たちの実態を地域に訴えていこうと、婦人部と家族会の代表七〇〇人、子ども代表一〇〇人があつまりました。

子どもたちは「私が大きくなるまでお母さんの首を切らないで」って、つぎつぎに訴えるし、お母さんたちも泣きながら、「私の涙は悲しいからではありません。母と子の生活をいたわりあってきた想い出、たたかいつづけてきた感激の涙です」と発言しました。

そうして、翌日の知事交渉でも、子どもたちが作文をよみあげたんです。

池田さん、知事さん、聞いてください

北海道室蘭市東園小学校五年　桜　谷　千　秋

私の家では、母さんと中学二年のお姉ちゃんと私の三人ぐらしです。

母さんは日やといで毎日失対に行って働いています。

いくら母さんが働いても、あまり物価が高いのでお金がたりません。それで学用品もな

かなか買ってもらえないし、ＰＴＡのお金もはらえない時もあるのです。また、ごはんは、朝はお汁とナットウぐらいです。夜は私のきらいなウドンをたべる時もありますが、私も姉ちゃんもわがままをいわないでがまんします。

私は日曜日やアブレは大きらいです。

母さんがうちにいてくれるからいいと思っても、たべる物がわるいからです。休みの時はお金をもらえないからです。お小使いも十円もらいますが、ためてちょうめんを買ったり、えんぴつなどかいます。このごろは母さんも弱くなり、心ぞうがわるいといって毎日病院にいっています。本当にかわいそうな母さんです。また、このごろはいろいろなとうそうで母さんのかえりがおそい時もあります。その時姉ちゃんとそうだんして、天ぷらをかって晩ごはんを食べて、うすいふとんにかたまってねるのです。

私は母さんに失対うちきりの話をくわしくきかされました。本当にびっくりしました。母さんの仕事がなくなったらどうしようと思い、学校へ行って先生に「どうして失対の仕事をなくすんですか」とききましたら、先生は「政府が悪いからだ」といいましたので、私は「早く池田さんでない人が日本の政治をしてくれればいいなあ」と思いました。

もうこれいじょうのびんぼうはしたくありません。それで、今日、札幌で、母と子のしゅう会があるときいて、私もここに参加させてもらい北海道の皆さんや、町村長さんや、知事さんに、私たちが本当に困っているという事を、この会場をかりてうったえるのです。

どうか、お母さんたちや、多くの人の働く失対をなくさないで下さい。

またアブレもなくして下さい。アブレがあると日曜日とつづく時もあるのです。

その時がいちばん困ります。

私はまだ子供で大人の事はわからないんですが、母さんが現場から持ってくる〝じかたび〟という新聞を見ると「私たちのように困る人が内地の方にもたくさんいる」という事だけはわかります。ですから、日本の働く人のため、どうか失対うちきりや、そのほかのいろいろな事はやめて下さい。私たち子供もがんばらなくてはなりません。

さいごに、どうぞ知事さま、お母さんたちの仕事をやめさせないで下さい。

（『じかたび』一九六三年四月一五日）

この集会は毎年ひらかれて、子どもが就職するころになると「働く婦人の北海道集会」に発展するんですけど、戦争と失業と貧乏の根っこがどこにあるのかに目ざめ、炭鉱の労働者や冷害に苦しむ農民との共闘など、失対の外にもうんと目をむけさせてくれる集会になりました。

武内　子どもたちも、ほんとによくがんばってくれましたよね。大臣や知事への手紙もかいてくれたし、署名あつめもいっしょにやってくれたしね。

私はあのとき、本部の教宣部長になったんですけど、『じかたび』にも、署名運動の記事がいっぱいのりました。門司の金原サトさんの手記なんか、わすれられませんね。金原さんはこう書いてます。

《宇部セメント恒見工場で工夫をしていた主人が昭和二八年、肺結核のため休職になり、その当

時私は、胃かいようの手術の直後の身で、八〇歳になる祖父をはじめ、一一、八、四歳の三人の子どもをかかえ、生活保護を受けながら貧しい苦しい日々を送りました。

主人のこづかい一〇〇〇円をひき、残金四五〇〇円で親子五人が生活するのはなみ大ていのことではありませんでした。のまず、食わずの日もあり、祖父や子どものためじっとがまんしなければなりませんでした。

そうしたなかでふと失対の事を思いだし、安定所にいってみました。でも、その体では土方仕事は無理との理由で受けつけてもらえませんでした。いろいろ考えた末、福祉で証明を無理におねがいしてもっていきましたら、やっと受けつけてもらえました。

その後、約三ヵ月ほどして安定所より呼出しがあり、いよいよ全日自労の一組合員となれるようなことになった時のうれしさは、それこそ天にも昇った気持で、前の日など、子どもたちが遠足にいく前夜と同じ思いで夜もねつかれませんでした。

いまでは八歳だった長男も中学を卒業し、私に加勢すると、社会に出て働いています。やれやれ一安心といったところで

現場近くにむしろをしいて（西福岡）

こんどは「失対うちきり」です。失対をうちきられてはまた前のような死ぬ思いをしなければなりません。

私のような無学なものにできることはまあ請願署名だろう、自分のため、組合のためにもできるだけがんばってみようと、一晩子どもたちに、これまでの苦労や子どもたちを道づれに死のうとまでしたこと、こんどの失対うちきりの話などをして聞かせました。そして請願署名のはなしを「母ちゃんは一〇〇〇名を目標にしてやってみよう」と話してみましたら、「母ちゃん、わたしらもいっしょにやる、がんばるよ」とはげましてくれ、その夜から町内一軒のこらずシラミつぶしにまわりました。

「大へんですね、いっしょうけんめいやって下さいね」と励まされたり、また、嫌だなあと思うこともたびたびでした。私が泣きごとをいえば〝母ちゃん死んだ気になったつもりでガンバロウと約束したのを忘れたの〟と子どもたちに励まされ、小倉市との境界、吉田の方に行くようになってからは、夜十一時ごろになると小さい子などバスの中でコックリコックリいねむりしているのを見ては、母ちゃんのためにねえ、と思わず涙ぐみ、子どもたちをだきしめました。毎夜こうして三人の子どもが交たいで私のおともをしてくれました。

そのおかげで一五〇〇名の署名をとりました。ひとごとではありません。自分のことです。まだまだいっしょうけんめいがんばります。私には、もう八五歳にもなる父母もおり、戦争で長男をなくし、毎日、涙のかわく間もない父母をみてきており、今度のたたかいに負けては、ゆくゆくは戦争でしょう。そうなったら私がそんな目に会うのです。どんなことがあってもやり通す決心です。》

（『じかたび』一九六二年一一月一二日）

●うたごえはたたかいそのもの

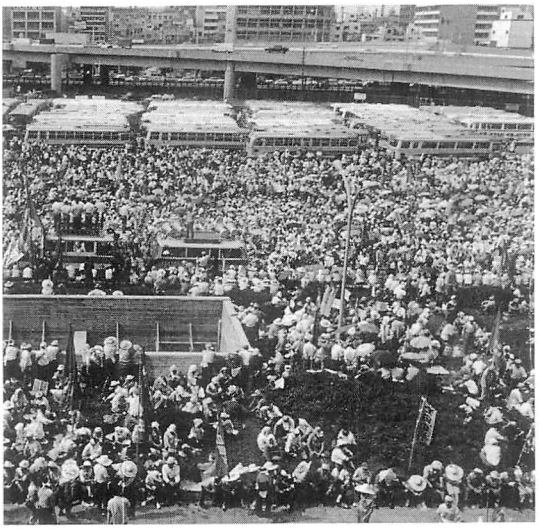
横尾　東京の婦人部は、うたごえ運動にとりくみました。失対うちきり反対といっても、口ではなかなか訴えられないから、歌でやろうとなったんです。

一〇〇人ぐらいあつまって、一行ずつでも詩をかいて、「いっぱい苦労したね」とかいえば、『苦労の数じゃまけやせぬ』となって、『世なおし音頭』ができたんです。だから、うたごえ運動は、たたかいそのものでした。

わしらの宝

一、生きるためだと　笑った顔に
　流れる汗が　ひかっていた
　この仕事が　この仲間が
　かけがえのない　わしらの宝

二、まけるものかと　腕くみあって
　子供のために　たたかってきた
　この力が　この組合が



労働省裏庭をうめた大集会

かけがえのない　わしらの宝

三、おばさんたちを　みていると
　　苦労してきた　暗さがないね
　　この底抜けの　明るさは
　　いったいどこからくるのだろう
　　この底抜けの　明るさが
　　かけがえのない　わしらの宝

（セリフ）

四、失業、貧乏、戦争なくせ
　　うたいつづける　世直し音頭
　　この姿が　この歴史が
　　かけがえのない　わしらの宝

五、老いも若きも　スクラムくんで
　　明るい大きな　あしたをめざす
　　このねがいが　この団結が
　　かけがえのない　わしらの宝

世なおし音頭

一、年はとっても　この心意気
　苦労のかずじゃ
　苦労のかずじゃ　ひけとらぬ
　　みんなでつくろう　平和なくらしを
　　失業とびんぼうと　戦争なくそう

二、たとえ体は　不自由でも
　生きる権利は
　生きる権利は　曲げられぬ
　　以下同じ

三、仲間同志だ　腕組み合って
　助け合いする
　助け合いする　全日自労
　　以下同じ

たき火をかこんで「じかたび」よみあい

うた声は消しごむ

スコップをもち、モッコをかつぎながら自然にうたが口からとびだし、あたらしいうたが生れるという塩井ヨシ子さん（五九歳）、塚野スエさん（四三歳）は、ともに東京の芝浦分会の活動家。

東京支部では、うたごえは平和の力、たたかいの泉と昨年一二月「日本のうたごえ祭典」に参加、そのご、あの成功を無にしまいと、あちこちでうたごえ活動がひろまっています。本部では、さきの二人を現場にたずね、いろいろ話をうかがってみました。

「悲しいとき、クシャクシャするとき、うたをうたいます。歌はゴム消し、苦しみがみんな消えていく」

と、前おきして、現場での活動、家庭でのことを話してくれました。

『私の現場にうたの上手な人がいます。長唄調の本式のうたです。仲間はみんな歌いたいという気持ちをもっていますが、むずかしくてうたえません。わたしの歌は歌ではなく、歌らしいもの。公園の草取りをしながら、何でもうたいます。そうして闘いに結びつけていきます。

お茶休みのときも、エロ話は聞きあきた。その時、サアうた声だよ、といって立ちあがり、「太い手細い手、日やけの手と手……」と歌いだすと、みんなついて歌います。「この手で苦労したんだからなあ、これからもこの手で闘っていくんだ」とコマーシャルを入れます。

文句を知らない人は、「エンヤコラドッコイショ」を力入れてやってもらいます。これならおとくいだろうということで。

「失対打切り反対のうた」をやる時には苦しみにたえてきた話をまずします。

「一枚岩の団結で……」という所に力を入れてうたいます。「一枚岩でガンバッてきたんだもん」。敵はなにかをはなし「敵を見つめて一枚岩でブッつけてやろうよ。ひとりひとりは小さな小石なんだから」と―。監督がきたら「あんたも労働者、都労連だろう。あんたもはいれ」というと「エヘヘ……」ということで怒りません』

六〇歳にあと一年という塩井さんは、子供のように無邪気で、娘のように若々しい。

『六〇年間、女はヒッこんでおれ、ということで黙っていたのだから、あと百までの四十年間は大いに出しゃばっていく。子や孫のために何も残すことはできないが「お母さんは貧乏をなくすために、よい社会を作るために活動した」ということだけは残したい。』

（『じかたび』一九六三年一月二八日）

それからあのころ飯田橋では毎朝、職安前でスイトンをつくって、二〇円で売りました。男の執行委員に水をくんできてもらい、婦人がかわりばんこに鳥ガラと野菜でつくったんですけど、みんなお金がないから、都電にものらず、歩いてくるでしょ。だから、ものすごくよろこばれてね。そういう助けあいから信頼関係ができていくんだなと思いました。

●二万人の母親大会での訴え――第八回母親大会

大道　失対うちきり反対を訴えた一九六二（昭和三七）年の第八回日本母親大会は、は

じめての地方開催で、大阪と京都でひらかれたのですが、一日に二万人があつまったうち、全日自労婦人部は、二〇〇〇人以上が白いエプロン、うちわをもって参加し、母親運動を量質ともに変えるとともに、失対うちきり反対を訴える歴史的な大会にすることができました。

島田　あのときに大牟田から「失対打切り反対」とししゅうした大きな横断幕をもっていったんですけど、大道さんが、白いエプロンがけで壇上にたつとき、いっしょに立ったんです。「失対うちきりは戦争への道です」とむすぶと、それこそ、われるような拍手で、それが手びょうしにかわって、二〇〇〇枚の「失対うちきり反対」のうちわがうちふられて、それはもう感激でした。

中小企業の分科会で、秋田のお母さんから「私は小さな工場につとめています。失対賃金より二〇円ほど安いので、せめて失対賃金ぐらいに引きあげてほしいと要求してきました。失対がなくなったら、賃金はますます下げられていくでしょう。失対うちきりに反対しましょう」という発言があり、自労のなかまも感動の拍手をおくったという報告をききましたが、あの母親大会で、失対うちきり反対が全国のお母さんたちの中にひろがっていきました。

大道　私は一九五九（昭和三四）年から中央の婦人部長として活動し、総評の婦人対策部員にもなりましたが、第八回日本母親大会についても、開催地をめぐって、総評と母親連絡会の代表の意見が対立して、おうじょうしました。準備会で総評代表が「四〇〇万の

婦人労働者を代表して」と東京での開催を主張したら、シーンとなってしまったので、私がガバッと立って、「母親運動は、お母さんたちのものです。一〇〇〇万の失業婦人を代表して地方開催を支持します」とやったんです。これで総評の婦人対策部員をクビになりましたが、大会は総評も統一してひらかれ、大成功をおさめたんですね。

それともう一つ、共闘でわすれられないのは、母親大会の直後にひらかれた総評の第一九回大会ですね。全日自労の各県代表六〇〇人が壇上から代議員席まであふれてならび、委員長の中西さんが「ルンペンといわれ、ニコヨンとべつ視されてきた私たちが、いまでは二三万の組合員を団結させ、一〇〇〇万をこす失業者や半失業者、貧困者のたたかいの中核となっています」と訴えたら、二〇〇〇人近い代議員と傍聴席から期せずして万雷の拍手がおこりました。そして、地域共闘がずっとすすんでいくんですね。

●〝長期紹介〟に反対して徹夜集会も

島田　一九六三（昭和三八）年に法律が改悪され、日々紹介を〝長期紹介〟にするとか、職場をしめつける〝運営管理規定〟（運管）とかがすすめられてきたので、大牟田では一二月に全員、五〇〇〇人くらいが笹林公園にあつまり、徹夜で反対しました。

運管がやられてからは、無理して働いて亡くなった人もでてきましたし、トイレに行くのも、休み時間だけにしろと監督が言いはじめたりしていました。長期紹介では、その間のお金のじゅんびがとてもできませんでした。子どもの着るものにしてもなんにしても、毎日毎日もらう賃金から帳面で三〇円、五〇円と払ってくらしていた、こういう生活の土

台がくずれちゃうという危機感があったんですね。それに、一一月に三池鉱山で炭じん爆発があり、四五八人も殺されたっていうことへのやりきれない怒りが、みんなの心の中にあったと思います。

たき火をかこんで夜をあかしたんですが、「おまえはなんでアカのいうことばかりきいているのか、病人をおいてでていくのか」と言われて、泣きながらでてきた、といってたなかまのところへ、その病気のご主人が、にぎりめしの入った重箱を丹前にくるんでもってきてくれました。子どもだけおいてきたので、心配して夜八時ころに帰ったら、ごはんも食べずに起きてたとか、おんぶしたままの子を翌朝、保育所へつれていったら「元気がないようだけどどうしたのか」と保母さんに言われたとか、そういう話をきくたびに、どんなことがあっても失対事業を廃止させてはならないと思ったし、家族の理解が深まるのがうれしく思えたことでした。

横尾　あのころ、電気洗濯機や掃除機なんていうのは、つかったこともなかったんですが、東京都なんかは、それをおしえてやるから、失対をやめて女中に行けという「家事サービス職業補導」という制度をつくったんです。だけど、都と交渉すると、「補導をうけたら失対にはもどさない」って言うでしょ。職安所長に一人ひとりよびだされて、そこに行けといわれたこともありましたけど、みんな、さんざん女中もやってきたし、それがどれだけ無権利なものか、よく知っているから、補導所の前で座りこみをやったり、朝早く、七時ころには行って、来る人を説得したりして阻止しました。

伊藤　一人ひとりがバラバラにされたらどうにもならない、失業と貧困は個人的に解決できるものではない、労働者の権利を確立し、社会保障制度を充実させるために、みんながいっしょにたたかえる場を守って働くんだ、という考え方に、だんだんなってきていましたものね。

●失業者を失対に入れる

浜本　夕張では、むこうが失業者を失対にいれないでうちきるというのなら、こっちは失業者を失対にいれるたたかいをやろうというので、失業者をずいぶん結集しました。そして、失対にいれろというだけでなく、地域の失業と低賃金に反対するたたかいをすすめていきました。そうすると、中小企業の一部では、すすんで賃金をひき上げるところもでてきました。それで私たちも自信をもって、〝一人が一人の失業者を〟というあいことばで失業者をあつめ、とうとう一九六四（昭和三九）年の七月に全国の先頭をきって、三八人の失業者を失対にいれることに成功しました。

あのころは警察の弾圧もきびしくて、夕張の委員長だった阿部良順さんが職安と交渉中に、不法侵入だって逮捕されたことがありました。それで、二〇〇人くらいが警察へおしかけて、一晩中「委員長かえせ、委員長かえせ」って叫んだんですが、朝になってみたら、草も花も、一本もなくなってるの。みんな夢中になって、一本一本ひっぱりながら叫んでたわけね。そして、ひっぱるものがなくなっちゃったからって、ハラだちまぎれに、若い警官のまん中をつかんでギューッとひっぱっちゃったおばあちゃんがいたんです。「イタタ

ッ」って声がしたんで、だれか警官にやられたと思って、書記長がすっとんできたんだけど、逆だったのね。

私もはじめ、わかんなくって、「何したの？」って、きいたの。そしたら、「あんまりハラたつから、ひっぱってやったよ」っていうので、「何をひっぱったの」って、まじめにきいたわけよ。そしたら「男の真ん中」だっていうから、顔が真っ赤になっちゃって。まだ四〇歳くらいでしたから。

●求職闘争にも率先して

武田　高知では大方（おおがた）という地域で失対に入れろの大闘争をやって、特定地域開発就労事業を実施させるんですが、これがステップになって求職者闘争が前進します。

一九七八（昭和五三）年、造船不況で倒産が始まると、長浜地域では七〇人ほどの失業者を結集してたたかい、長浜縫製工場をつくらせることができました。このとき、朝がけ夜がけで市におしかけ、部落解放同盟の窓口一本化を打ち破って、全日自労から一〇人を就職させることができました。それで、のこった六〇人をどうしてくれるかとたたかい、中高年雇用促進法の措置にのせ、制度活用のたたかいが本格的に始まるわけです。

ところで、高知では、法案が通ってから、なかまの内部で一つの問題がおきました。組合は五〇〇円ずつのカンパをもらって、中央へも押しかけたわけですが、「失対がうちきられるからといって金をあつめといて、いまだにうちきられないじゃないか、五〇〇円を返せ」と、組合事務所がとりかこまれたんです。

暴力をふるう扇動者がいて、チェーンをふりまわし、キリも持ってきていました。それで私たちは男の役員を後へ下がらせ、女が前に出て、「チェーンが当たったら許さんぞ、キリが刺さったら許さんぞ」と言って押して行ったんです。さいごは、みんながたたかったから、いまだにうちきられないんだ、ということもわかってもらえましたけど、なかまがほんとに団結してたたかうということのむずかしさ、討論の大切さというものを身をもって感じたできごとでもありました。

●〝しぶとい、こわい〟交渉

大道　労働省なんかにもずいぶん押しかけましたが、私は労働省と厚生省と検察庁と三つ、わすれられない思い出があります。

まず労働省ですが、一九六五（昭和四〇）年一月に全国の婦人部長だけで有馬職安局長と交渉したときのことです。局長は交渉当日になったら、神奈川かどっかへ行っていないというんです。「なにいうてんねん、約束がちがう、よんでこい」とへたりこんで、とうとう局長をひきずりだして交渉を始めたのが八時か九時でした。それで、「このとおり、帰る汽車もあらへんのや」と、みんな、帰りの急行寝台券を局長の前にほうりなげたら、サッと顔色を変えてね。一一時まで交渉しましたが、あとで、有馬局長が自民党のえらいさんになったとき、感想をきいたら、「なんと女というものは、しぶとい、こわいものやと思いました」と言っていました（一三五頁写真参照）。

ところが、これをまねして、男が同じようにやったら、九州の男性が二人つかまったん

ですね。

それをかえせというので、検察庁をとりまいて、中へ入って階段をバーッと上がっていって、「こら、なかまをどこに入れてんねん、だせ、会わせ」とさわいで。まあ、火つけでもなんでもしかねないけんまくだったから、何されるかわからんというので、すぐ釈放されました。

三月に厚生省におしかけたときは、門をしめられたので、先頭にいた私がはさまれたんです。「あいた！」って倒れて、「骨おれたー」ってさけんだら、なかまがすぐ車で代々木病院につれていってくれました。そしたら、筋がちがっただけだったんですけど、帰ってきて厚生省の一番上の階段に上がって、「みなさん、骨の三本や五本おれたかて、ビクと

みんなでやりぬいた中央行動——静岡

【静岡】三月二十日～二十四日の中央行動の指令を、分会は火の玉でもころがりこんだようにうけとった。落語じゃないが、さきだつものがない。

婦人部集会

情勢のてんぽう、春闘のきびしさ、中央指令のせつめいをして、どうやりとげるかを婦人部の自主的な討議とまとめにゆだねた。

名まえがケガをしたんじゃない

二人上京。かえってきて職場報告。二十三日厚生省へみんなでいったのよ、おまわりさんでバリケード、鉄のさくをしめて入れないの、入れろ入れないでもみあっているとね、婦人部長がケガをしたの……そのひとの名、なんていうの……名まえがケガをしたんじゃあない、婦人部長がケガをしたのよ……なかまはこの報告で、じゅうぶん中央のきびしさをしった。

（〝**自労しみず**〟から）

（『じかたび』一九六五年五月二四日）

もせえへん、大じょうぶや」とやったわけです。そうしたら、なかまは「骨おれても大道さんがんばったはる、もう動かんぞ」と座りこんだわけ。いまも地方へ行くと、「大道さんは骨おれてもようがんばらはりましたな」と言われるんですけど、やっぱりたたかいには気合いが必要なんですよ。

●『じかたび』の読みあい話しあい

司会　そのたたかいのなかで、全日自労は一九六一（昭和三六）年ころから、「機関紙中心の組合活動」という方針をうちだします。中央機関紙『じかたび』をみんなが買って、職場で読みあい話しあい、それをつうじて、職場からたたかいをおこしていこうというもので、のちには組合の外へ拡大していく運動へも発展しますが、とくに「読みあい話しあい」は、活動の源泉となりましたね。

新本　『じかたび』の読みあい話しあいはかんたんなようだけど、これほどむずかしいことはないですね。新居浜支部でも、定着するまで八年かかりました。

あのころ中西さんが「中央でこうやろうと決めたことや、労働省交渉はこうだったとかを、いちいち手紙で知らせたいけれども、それはできないから、『じかたび』でみんなに訴えてるんだ」と言われましたね。

息子のような中西さんたちがせっかく『じかたび』という手紙をくれるんだから、これを読むのは義務だと訴えていったんです。

私は、〝じかたびばあさん〟〝じかたびきちがい〟と、なかまから笑われるんですが、月曜に職場委員が『じかたび』をもらいにくるとき、私は、ただ渡すだけということをしないのです。「月曜と火曜は読みますよ。だから眼がねをわすれんように」といちいち言うんです。

そして、読みあいのとき、私は玉子とか、やわらかいお弁当をもっていきます。早く食べられるようにして、一服する時間をおいて「さあこれから『じかたび』を読みますよ」とやるわけです。

ところが、委員長でもだれでも「きょうは『じかたび』はええがな、雨賃で待機しとる日にでもせんかね」とか言うの。それで「いいえ、家に帰ったら、読んどるかどうかしらべるわけにいきませんから、ここでいっせいに読みましょう」といって、毎週欠かさずやりました。

ある日、ごはん食べ食べ、「きょうは新本さんにしかられるんじゃ、眼がねわすれてきたから」とか、ぼそぼそ話をしているなかまがいました。それで、「きょうはあんたに何ページを読んでもらおうと決めて、たのしみにしとったんじゃが、ええですよ」と言ったんです。そうしたら、しかられると思ってたのが、たのしみにしてたといわれたもんだから、つぎの日には朝から私に眼がねを見せにくるんですよ。

武内　いまはもう、くばっただけではぜったいに読まなくなってますから、読んであげて、質問にこたえるようにしています。

菅原　執行委員会のはじめに読んだり、大事なところを読みあったりしていますが、声をあげて読みあうと、頭に入るんですね。

新本　私は尋常小学六年も満足にいけませんでしたが、組合の執行委員にさせられ、社会福祉をやれといわれてから、委員長にたのんで六法全書を買ってもらい、冬はこたつの中で二時間、夏はカヤの中で、子どもが寝しずまったあと、辞典をだして勉強しました。『じかたび』の読みあい話しあいで、字が読めるようになったなかまもいっぱいいます。

島田　そのころ、大牟田の中友地区では、婦人部が中心になって「文盲学校」もやりました。一年生の書きとりから始めたんですが、「生まれてはじめて自分たちを人間としてあつかってくれる先生にお会いできた」って感想を書いてくれたなかまもいました。

伊藤　山形では一九五五（昭和三〇）年からですが、『日雇婦人労働者と子供の生活綴方集』をだしました。はじめはみんな「もう何年も字を書いたことがない、私の頭で書ける

もんですか……」とためらいつづけていました。でも、生活そのままをかざりなく書くなかで、生きる権利と、母として子を育てる責任と誇りとが自覚され、強く強く生きぬけとむちうってくれる作品ができてくるようになりましたね。

ぼうふう

小学三年　市村千鶴子

わたしの母ちゃんは、毎日々々もんぺをはいてかつ子の手を引いて川原に働きに行く。
朝、学校にくるとき空がくもって天気がわるくなりそうなので、わたしは心配になった。
「台風がくるんだと」といったら母ちゃんは、窓のすだれの所に板をぶっていた。
「きょうも行くのか」と聞くと「いかねどお金なくなっから行く」と言った。
父ちゃんは、東京に行った。まだ帰って来ない。台風でも帰って来ない。
母ちゃん、風が吹いても強い。
母ちゃんほんとにいい母ちゃん

（『日雇婦人労働者と子供の生活綴方集』から）

四　生きて生きてたたかって働いて

――失対再確立、六五歳線引き反対のたたかい

第一次失対うちきり攻撃が六〇年安保闘争の潮がひいたときをねらってかけられてきたように、七〇年安保闘争の高まりがすぎると、第二次失対うちきり攻撃がはじまりました。そして一九七一（昭和四六）年五月、「中高年雇用促進法」の成立によって、失対事業への入口が完全に閉ざされてしまいました。

これにたいし全日自労は、一九七一年の〝ドル・ショック〟、一九七三年の〝オイル・ショック〟などにより雇用・失業情勢が深刻さをまし、高齢化社会が急速に進行してくるなかでは、失対事業のうちきりではなく、失対事業の再確立こそ社会的に求められている、と提起します。働ける人は働きながら生活することが、人間性を守るうえでもどれほど大切かを訴え、現行失対事業の欠陥は改めながら、失業者と町に役立つ失対事業に再確立していこうという提案は、失対事業の民主的改革の努力とあいまって、各界から支持され、自民党の国会議員の半分近い賛同署名も得るところまで発展しました。

しかし、労働省は失対うちきりの路線を変えようとせず、衆参同時選挙での自民党の圧勝のなかで、一九八〇（昭和五五）年、「五年ていどの期間をおいて六五歳以上の失対就労者の排除」を打ちだしてきました。これは、雇用保険制度などもふくめて、労働者の権利を六五歳で一切うばいさってしまう政策の一環でもありました。これにたいし、全日自労は総力をあげた反対闘争を

くみ、共闘をひろげながら、自らの力を基礎に働く場を確保する「事業団運動」などにもとりくむなかで、一九八五（昭和六〇）年の失対制度調査研究報告では、六五歳線引きの基本はくずせなかったものの、当面、線引き年齢を七〇歳に引き上げさせ、その後も二年間は月一〇日を限度とした高齢者就業機会開発事業（任意就業事業）で働けるようにするなど、一定の成果をえることができました。

また、全日自労は一九七一（昭和四六）年に「失対のなかまだけでなく、建設労働者、中小企業労働者、高齢者、失業者などとともに強大な組合をつくろう」という方針をだし、一九八〇（昭和五五）年には全国建設及建設資材労働組合（全国建設）をはじめ三三の労働組合と組織統合し、全日自労建設一般労働組合（建設一般全日自労）と名称も変更して、新たな出発をしました。

●「民主的改革」にとりくむ

司会　失対事業を町に役立つ事業につくりかえよう、労働規律もきちんとしよう、という「民主的改革」の運動は、なかまの意識を変えるたいへんなとりくみでしたね。

武田　そうですよ。民主的改革の方針を現場で討議したら、「中央本部はいつから労働省に飼いならされたのか」とか、「おまえは、きのうまで仕事をするなと言ってたじゃないか」とかずいぶん言われました。実際「失業の責任は政府にあるんだから、政府が生活を保障すべきで、失対事業では働く必要はない」と言って、雨がふれば監督をだまして映画をみに行くなんてことを、私が先頭に立ってやってたんですから、「地域に役立つ失対事業にし

よう」なんて、言う方も、こそばゆいんです。

でも、「失対うちきりは、地域に役立っているかどうかが一つのポイントになっている。自分で、役立っていると思えるか」というと、婦人はわかってくれました。そして、「民革」のすすみ始めた支部が市長さんから表彰状をもらったり、学校の先生からお礼を言われたり、生徒さんから感謝の作文をよみあげられたりすると、心地よいんですね。それで、だんだんすすんでくるんです。

浜本　ほんとうにたいへんだったけど、民主的改革にとりくんだおかげで、私たちを見る町の人の目が変わってきましたね。

あのころ、あちこちで苦労した話をずいぶんききましたけど、夕張でも二～三年かけて、なかまの意識を変え、「あんたたちの仕事はきれいだ」「いい仕事をやってくれる」と市民の人たちから言われるような状況をつくりだしていましたから、七～八年前なら、けんもほろろにことわっただろうと思うような人まで、失対再確立の賛同署名をしてくれました。それに、老人医療のことにしても、原水爆禁止のことにしても、地域の人の要求にしても、先頭に立ってたたかってきましたから、あの人たちはほんとうによくやってくれるね、といわれるまでになっていました。

だから、民主的改革っていうのは、仕事のことばかりでなく、労働者らしい組合をつくっていくことだと思うし、なかまを守るためにどうするかを真剣に考えることだと思うんです。だから、中央の方針もよく勉強するし、『じかたび』もよく読むし、定期的に学習も

するし、そういうことがあるから、署名だのなんだのといってもすぐ行動できるんです。ただ命令で署名をやれといってきたって動くもんじゃないですよ。

●自分たちで町の役にたつ失対づくり

横尾　私たちは、民主的改革の方針がでる前から、みんなで話しあって現場配置を変えたりしていましたけど、民主的改革というのは、まじめに働くことだけじゃなくて、「自分たちの頭で考えて町の役にたつようにしていく」ってことだと思うんです。だから職場委員会の確立がとっても重要で、ここで相談しながら、公園の仕事がひまなときには、役所から言われてない、表の街路樹の草むしりとかもやりました。少しくらい雨がふっても、カサをさしたり、木のかげで掃除したりしました。住民にも、とっても喜ばれて、町会長さんに署名をおねがいすると、町会の中にずっとまわしてくれるようになりました。

島田　私の現場は学校現場なんですが、第二組合と半々くらいだったので、規律ある仕事はすすめにくかったですね。その日その日、とにかく居りさえすれば金になる、それでいいんだっていう人たちが半分いるわけですから。

「市民に役立つ仕事をしなければだめだ、全日自労ががんばらなければ、あの人たちもがんばるわけがない。そうしたら失対はなくなってしまう。それでもいいのか」と話すと、しぶしぶついてくるという状態でした。それが、ずっと身についてきて、いまではぴしゃっとなってきました。

ここの学校は学徒動員で、ずいぶん亡くなった人をだしているんですけど、同級生が記

念碑を建てるってことになったときには、なかまに訴えました。「あの悲惨な思いを子どもたちに二度とさせてはならないし、失業と貧乏と戦争に反対してたたかってきた私たちの生きかたを知らせるにもいい機会だから協力しよう」って。それで、除幕式にも参加させてほしいとおねがいして、女ばかりでしたけど、式場のまわりの芝生を刈ったり、雑草をとったり、植木のせん定をしたりね。期日がありますから、休みの日もでてきて、腕も肩もうごかなくなるくらいやりました。当日は千羽鶴に、私たちの願いを書いて短ざくもつるしました。そういうことを先生たちも見てますから、賛同署名も無条件にくれるんですね。

●失対再確立の賛同署名をねばり強く

司会　そうした民主的改革の運動と失業者闘争をすすめ、住民の支持と共感がつくられてきましたから、自治体首長との合意の運動、議員さんなどにおねがいした賛同署名の運動もすすんでいったんですね。あの運動でも婦人のねばりがものをいいましたね。

横尾　そりゃそうですよ。賛同署名をもらうんだって、男の人は、相手がいなかったり、ことわられたりしたら、もう行かないでしょ。だけど女は、もらえるまで何回でも行くんですから。同じ人が行くときもあるけど、現場のみんなが行くようにしていますから、一人がことわられても、平気で、つぎからつぎへと行くの。そうして、なんべんもやっているうちに、要求の切実さがわかってくれるのね。どんなことをしてでも子どもを育ててこなきゃならなかったから、ねばりもでてくるのよ。中には「書きゃいいんだろう」なんて

怒りながら書いてくれた議員さんもいましたけど。

松沢　婦人の中央行動を何回か組んで、国会議員さんから賛同署名をもらったときもすごかったわね。議員会館の部屋から出てきた自民党の議員さんに「あーら先生」なんて言って抱きついちゃったり。私はまた知ってる人かと思ったら、ぜんぜん知らないけど、バッジをつけてたから議員さん本人に会えたと思って、ついうれしくなって抱きついたっていうんだから。

岡山のなかまは、帰りの新幹線の中で自民党の議員さんから署名をいただいちゃいましたものね。

浜本　労働大臣や議員さん、市長さんへの手紙も第一波、第二波、第三波とやりましたね。夕張では市長の奥さんがその手紙をみたわけ。それで、市長さんに「お父さん、失対の人ってたいへんだね、なんとかならないの」って言ってくれたんです。とにかく、カタカナの、ナナメになったたどたどしい字で真剣に書くから心を動かしちゃうのよね。それで市長さんは「自労の婦人部はうちの母ちゃんを泣かしてしまった」って話してたそうだけど、あの手紙やハガキは効果がありました。

松沢　失対制度調査研究委員の先生の自宅にもずいぶんお願いに

行ったけど、ベルを押して、だれもでてこなくても、もしかすると居留守をつかってるかもしれない、クリーニング屋さんかなんかがくるはずだから、それまで待って、居たら、会いにいこう、なんてがんばったものね。

亡くなった大河内一男先生のお宅へうかがったときは、奥さんが私たちと同じようなかっこうをして出てきて、「私もダイコンのねだんがいくらか、ちゃんと知ってます」なんて言うので、「先生のところはもうかってるんだろうけど、本ばっかり買っちゃって、奥さんにお金をわたしてないんじゃないか」なんて同情しながら帰ってきたこともありました。

浜本　夕張では来道した通産大臣に直訴しようという行動をおこしたことがあります。婦人ばかり二〇人くらいで、大臣がくる一〇分前くらいに「失対うちきり反対」とか書いた大きなステッカーを市役所と職安の前にズラーッとはっちゃったの。職安も市も組合に電話したらしいんだけど、はった人間はこっちにいるし、書記長も「さあー、おれは知らない」って。あとで市は美化条例にひっかけようとしてきたんだけど、「なんでなの、きれいにはってあるじゃない、赤、青ときれいでしょ」って切りかえしてね。男は、これをやったら何にひっかかるとか、理屈で考えるけど、女の人はそんなこと考えない。ただ、会ってくれないから、私の方から行くっていうだけなのね。

●労働省、大蔵省前の座りこみ

司会　一九八〇年に六五歳線引きの報告がだされてからは、それに反対し、〝働きたい高齢者に働く場を〟という運動が全国でとりくまれますが、なかでも、労働省、大蔵省など

へは関東の婦人のなかまがくりかえしくりかえしおしかけましたね。そこで、東京、神奈川の現在の婦人部長である坂口さん、原さんにも加わっていただいて、話をすすめたいと思います。

松沢　一九八〇年代というのは、軍拡・臨調路線で、福祉や教育の予算がけずられ、地方自治体への補助金もへらされてきますね。失対事業の予算も大はばにへらされ、それまで月に二二日あった就労日数が六五歳以上、七〇歳以上とわけてけずられ、六五歳線引きを先どりするような攻撃になってきたんです。だから、〝軍事費をけずって福祉を守れ〟という共闘を広げながら、〝失対予算をけずるな〟〝六五歳線引き反対〟と、労働省や大蔵省への要請、座りこみを、それまでにもましてくりかえしたわけです。

坂口　大蔵省前というのは、あまり座りこみをやったことがなかったからかもしれないけど、一九八三（昭和五八）年の一一月に関東の婦人一〇〇人が座りこんだときは、トイレもかしてくれなかったのね。あれで、みんなアタマにきたんです。

「大蔵省はトイレもかさない。人権じゅうりんだ」とか宣伝カーで訴えながらぐるぐるまわり、どうしてもがまんできないなかまが第一陣でおしかけて、「トイレをかしなさい」「女は立ちしょんできないでしょ」とせまったのね。それで守衛も、しぶしぶみとめざるをえなくなったんです。

原　トイレもなにもないような現場で働かされてきたこともあったんだから、人間あつかいしないやりかたには、はずかしいもなにもとおりこして、ガンガンやったのよね。

松沢　あのころから、参加したなかまが一人のこらずマイクをもってしゃべるようになったんですが、宣伝カーの後ろには一人もいないのに、「こちらは全日自労のデモ隊列です」とやってしまったり、「労働省に座りこんでいます。あっ、大蔵省です」ってやったり。だんだんなれてきて、一人ひとりの気もちを訴えるようになるんですけど、はじめは、大蔵省の前で、「全員がしゃべるまで帰さないからね」といったんです。そうしたら、「なんて話したらいいの」っていうから、「自分のことをしゃべればいいんだ」っていったら、まず高橋ミサオさんがマイクをもって、「お役人さま、私は大森の高橋ミサオです。六七歳です。一人娘は四〇歳で障害者です。クビになったらこまります。どうか助けてください、おねがいします」って。

だれ一人、原稿など持たず、つめたい雪にうたれながら、「子どもは大きくなったけど、亭主は盲人で、私が働かなければなりません」「八四歳の母と二人ぐらしです。ほんとうにクビになったらこまるんです」と、自分のことを訴えるんです。「大蔵省のえらーい人、きいてください」ときりだし、話しおわってから「ああ、もしもし、すいません、わすれてました。私は七四歳で、〇〇現場で働いています」と自己紹介して、みんなから「よくやった」と拍手をもらったなかまもいましたけど、一人ひとりの訴える内容がほんとうに切実なんですね。

原　そうやって度胸もついてきてたから、一九八四（昭和五九）年の正月あけに、大蔵省の中の廊下に座りこんじゃったときなんか、ほんとうにみごとだったですね。私たち三

人が守衛さんのところで面会の申しいれみたいなかっこうで話しているあいだに、三〇人くらいがサーッと入って腰かけちゃって。号令一つでゼッケンをつけ、一人ひとりが丸めてもっていたポスターをパッと広げてね。

松沢　三時間くらい押し問答をしたら、主査があってくれることになったんだけど、こっちは座りこむことしか考えてなくて、要請書なんて用意してなかったから、ポスターを全部あつめて、「これが要請書です」って、読みあげたの。「あなたは人間の心があるのですか」なんていうのを本人の前で読むんだから、ひや汗びっしょりでした。

〝働きたい高齢者に働く場を〟アピール

働きたくても仕事がない、年齢や条件にみあった働く場がないほどつらいことはありませんね。私たちにはそれがよくわかります。とくに世界一の長寿国となった日本で、健康で長生きするためにも、若い人たちの負担とならないためにも〝働く場がほしい〟とねがう高齢者の声は、大きな社会問題になっています。

ところが最近の軍備拡張、福祉切捨ての施策のもとで政府は、失業対策事業の打切りをめざして来年度には現在働いている六十五歳以上の四万人の首切りまで強行しようとしています。

失対で働く婦人たちは六十歳、七十歳が多く、ひとり暮しや障害のある子を養っている

大蔵省の中の廊下に座りこみ

うえ、年金も二～三万円の国民年金しかなく、働かなければ生きていけない人ばかりです。しかも働く意欲も能力もあり、働けるうちは働いて自力で生きたいと健気にがんばっているのです。

かくいう私たちも揃って八十の坂を越えました。しかも日々仕事に精を出しており「考えること、行動すること」が生きることだと思っていますので、全日自労建設一般労組婦人部の「失対打切り反対、六十五歳首切り反対、高齢者に働く場を！」の大闘争を心の底から支持し、支援いたします。

憲法二十五条に照すまでもなく、政府は国民の生存権を保障する社会的使命を果して欲しいと要望してやみません。すべての高齢者がその能力と体力にみあった働く場を保障され、日本に生れ、長生きしてよかったといえる社会を私たちは希求します。そのために学び、考え、行動いたしましょう。

一九八四年　　月

よびかけ人〈年齢順〉

浅賀ふさ（日本福祉大学名誉教授）
櫛田ふき（日本婦人団体連合会会長）
住井すゑ（作家）
石井あや子（新日本婦人の会会長）
羽仁説子（日本子どもを守る会会長）
矢島せい子（障害者の生活と権利を守る

全国連絡協議会会長）
丸岡秀子（評論家）
石垣綾子（評論家）

きりとり線

賛同書

失業対策事業の六五歳線引き、四万人首切りに反対する運動を支持し、高齢者の雇用対策を求めるアピール「働きたい高齢者に働く場を」に賛同します。

年　月　日

住　所

氏　名

（職業・団体名）

高齢者の仕事についてご意見を、お聞かせください。

司会　一九八四年の七月には、八〇歳以上の著名な婦人が「働きたい高齢者に働く場を」というアピールをだしてくれましたが、あれは大きな力になりましたね。

松沢　ええ。あのアピールは、櫛田ふきさんたちが「私たちで役立つことなら」って、発表してくださったんですけど、あれだけの先生がたがそろって、高齢者の体力・能力に

みあった働く場をつくることの重要性を訴えてくれたってことで、ほんとうに勇気づけられましたし、あのアピールでの賛同署名は全国の世論を変えていきました。

あの賛同署名はピンク色の横長の紙をつかったんですけど、「日本中をピンクの賛同署名でうめつくそう」ととりくみ、それを交渉で読みあげようと、婦人部が初めて独自に県交渉をしたなんていうところもでてきました。労働省にも何回か、櫛田さん、石井あや子さん、それに「私も八〇歳になったから」って松田解子さんもかけつけてくれて、いっしょに交渉したり、座りこんだりしてくれました。こんなことって、なかったですよね。

原　ピンクの署名は、市長さん、部長さん、その奥さん、民生委員さん、大学の先生、それに老人クラブの会長さん、遺族会の会長さん、労働組合や地婦連の役員さんなど、ほんとうにたくさんの人からいただきましたけど、「働きたい高齢者から仕事をとりあげるのは、自分の力で生きようという心を殺すもの」とか、みなさんが一言、書いてくださったのね。ほんとうに励まされて、世論を大きくつくりだしていく力になりましたよね。

坂口　それにしても、去年（一九八五年）の一〇月一六日から、労働省の結論がでた一一月二〇日までの労働省前座りこみはよくやりましたね。最初の日は、機動隊の車がズラッとならんでいるなかで、東京・神奈川の婦人ばかりで始めたんですけど、東京では、その前の婦人活動者会議で、「こんどの座りこみは何時までかかるかわからない、パクられるかもしれない。それでも参加してもらえるか」ってきいたら、四〇人中一七人くらいの手があがったんですね。それで当日はみんな、下着も洗たくしたものをはいてきてね。

松沢　機動隊は私たちの数倍いたけど、ビクともしませんでしたからね。統一劇場の岡田京子さんたちがきて、歌をうたってくれたときも、警官が「シュプレヒコールはやめろ」と言ってきたけど、「歌はシュプレヒコールか、文化だろ、文化だ文化だ、どこがわるいんだ」なんてやりかえして。

原　警官は、横断幕をまくれって言ってきたでしょ。「陳情なら立って横断幕をひろげろ、座っているのなら横断幕をまくれ」って。それで警官が棍棒を横断幕の下からいれて、まくろうとしたら新宿の本山ゆきさんが、「さわるなー、エッチー」って大きな声でね。

松沢　私もアタマにきて、「ご通行中のみなさん、警察官は私たち婦人に〝マクレ、マクレ〟と言うんです」ってやったの。

坂口　あれはきいたね、本山さんにどなられた警官なんか、サーッと、とびのいたもの。

松沢　それで、通行人の若い女性に棍棒があたって、ちょっとよろけたら、「だいじょうぶですか」なんてくっついていくのを見たもんだから、「若い女性には親切にして、元小町にマクレとはなんだ」ってやったら、「そうだそうだ、オレたちは元小町だ」って。

坂口　警官にたいしても、一人だったりすると、「ちょっとお兄ちゃん、おいでおいで」って呼んで、「あんた、年はいくつだい？　そうお、お母さんはいるの？　あんた、給料はいくらもらってるの？　それでお母さんを食べさせていける？　そう、無理でしょ、私たち、なんで座ってるか知ってる？　私たちだって息子の世話になれないんだよ、だから、体力・能力のあるうちは自分たちが働いて食べていきたいんだよ、わかる？　自立だよ」

「まくれまくれ」と警官が…

とか言って、みんなで説得しちゃいましたからね。

原　やっぱり三〇年のたたかいのつみかさねと、母親のやさしさなんだと思いますよ。若い警官もそうだけど、守衛さんたちなんて、ずいぶん変わっちゃったものね。毎日毎日、宣伝カーで訴えてるのが心を動かしたんでしょうね。日ごとに親切になっていくんです。

松沢　なかまたちも、一日の行動のさいごに差し入れのお菓子なんかをくばると、「ずっと立ってるあのお兄ちゃんにもあげてくれ」って。ほんとうにやさしいんですよ。それなのに、失対から追いだすなんて、考えれば考えるほどゆるせないわね。

原　それから、こんどは全国のなかまもいっしょに座りこんだし、夜は民間や事業団の男性たちも泊りこんでくれたでしょ。そして、全国からよせられた赤旗を毎朝、ズラーッとガードレールにかけて、全国のなかまの手紙をかわるがわる宣伝カーでよみあげたからほんとうに全国のなかまの代表としてがんばらなきゃあっていう気もちになれましたね。

坂口　全国のなかまのカンパのお金で帽子を買ったでしょ。ちょっといいのにしようというので、二〇〇〇円のを問屋で一〇〇〇円にまけさせて。それで、「全国の婦人を頭の上にのっけて座りこんでるんだから、しっかりね」って言って。

松沢　厚生省交渉にきた民医連の病院の人が一万円もカンパしてくれて、びっくりしたけど、あの座りこみは、お金では買えないすばらしい連帯をつくりだしたと思います。

坂口　ほんとうに、あとに引けないたたかいだったけど、あのたたかいは、生活のためでもあるけど、働く喜びのためのたたかいでもあったという気がします。どんなに年をと

っても、社会に役立って生きていきたい、働くこと、たたかうことが生きることだっていう実感が、労働省前に行くとズシリと感じられてくるんですね。

松沢　あのたたかいでは、全国のなかまが月一〇〇〇円、合計三万円の闘争積み立て金をしたでしょ。あれで、中央集会には九州から特別列車を走らせるとか、北海道や四国からも飛行機をかしきりみたいにしてくるとか、大闘争ができたってこともわすれられません。そういうたたかいをみんなでやったから、任意就業事業もかちとれたんですね。

●このすばらしい組合を大きくして

司会　このすばらしい組合をどうやってのこし、大きくしていくかがますます重要な課題になっていると思います。やめるなかまのよりどころはやっぱり組合だし、強く大きな労働組合があってこそ、仕事も社会保障もたたかえるし、平和運動の先頭に立つこともできますからね。一九七一年に失対の入り口がとめられ、追いだし金攻撃で二万五〇〇〇人がやめさせられるんですが、その後の拡大運動で組合員はふえていきますね。このときのとりくみはどうだったんですか。

菅原　これは横浜市内のなかま全体でつくっている全日自労の横浜地区協でとりくんだんですが、失対の入り口がしめられても、働きたい人はおおぜいいる、どうするんだ、失対以外の働き場をつくれと、議会に請願したり、さんざん交渉したりしました。そして、一九七一（昭和四六）年、二〇人分でしたが、高齢者就労事業の仕事がでたんです。

働きたい人がふえてくると、予算枠がきまっていますから、月に一〇日働けたのが三日

とか四日になってしまう。そこでまた、どうしてくれるとおしかけて予算をふやす、こうやって、いまでは一〇〇〇人近くの人が高就事業で働き、組合に入っています。

浜本　北海道では学童保育の先生方を組織し始めてからまだ二年たらずですけど、どんどん政治的にも高まって〝失対のおばちゃんたちにまけられない〟ってがんばってるのね。

このあいだ、学童保育支部の大会で、歴史を語ってくれってよばれて、「私たちは三〇年間、ハチマキと団結をはずさずにやってきたんだよ。子どもを外におきながら働いてきたけど、あのころ学童保育という制度があったら、子どもたちにあんなみじめな思いをさせなくてすんだんだ。ほんとうに、みなさんのやってる学童保育って仕事は大切なんだよ」って話したら、みんな涙を流して聞いてくれました。

季節労働者（建設労働者）の人たちも一万人以上組織しましたけど、この人たちの半分以上は女性で、大工さんの手元などの仕事をしているんですね。そのほか、振動病で苦しんでいる人たちなども組織していますが、あとつぎが生きいきと活動しているのを見てると、なんともいえませんね。

武田　まだ全日自労と全国建設などが統合していないときでしたが、毎年、建設一般全国交流集会がありましたね。老いも若きも一つになって、すごい力だと感銘しました。

あのころ造船不況で組織した労働者が何人かずっと組合につながっていて、いままた倒産問題で相談にのってほしいと言ってきています。労働者や失業者、高齢者がこまったときにたよりになるのは建設一般全日自労ですからね。国に高齢者の対策を十分にとらせる

ためにも、この組合を大きくするためにがんばりぬかなければと思っています。

原　私も去年、秋田のわらび座で民間の人たちと交流会がひらかれたとき、戦争の話、失対に入ってからの話などをしました。私は失対に入ったころ、スト破りのようなことをしちゃったことがあるんです。そんな私のところへ、分会の真辺委員長が訪ねてきて、組合のことをやさしく教えてくれたんですね。だから私も、私たちが三〇年間のたたかいできずいてきた財産の引きつぎ手をもっともっと多くしなければと思うんです。

松沢　いま、私たちの組合は七万人ぐらいで、そのうち建設産業や民間の労働者が二万六〇〇〇人くらいいるんですが、ここも六割くらいが婦人なんですね。学童保育とか、保育パートとか、臨時教員、ビルメンテナンスなど、若い人も、中高年の人もいますけど、私たちの組合には、やっぱり低賃金や不安定な雇用の労働者があつまってくるんです。

そして、この人たちの運動っていうのは、賃金はもちろんだけど、保育所のこと、母性保護のことだし、北海道の建設労働者ならトイレのことだし、みんな私たちがやってきたことなんですね。だから失対のなかまと若い人がいろんな集会や沖縄基地ツアーなんかで交流しあうと、おたがいに勇気がでてくるし、失対のなかまも、〝あとはたのんだよ〟じゃなくて、〝いっしょにがんばるんだ〟っていう気もちになってくるんですね。

五　七〇歳でもうひと花、ふた花

今年（一九八六年）の八月から、七〇歳以上のなかまは失対事業をやめざるをえなくなりました。来年以降もたくさんのなかまがやめていきます。しかし、建設一般全日自労は、会社にも、身分にも、年齢にも、思想信条にもかかわりなく、一人でも入れる労働組合ですし、七〇歳以上の多くのなかまが、失対をやめても、組合にのこってがんばる決意をかためています。〝もうひと花もふた花も咲かせよう〟と―。

●子どもたちはどう育ったか

司会　みなさんの〝もうひと花〟の気もちをきかせていただきたいんですが、その前に、みなさんが苦労して大きくした子どもたちがどう育ったか、さしつかえなかったらきかせてください。

菅原　すぐ近くに嫁にいった娘がいるんですが、これが世話好きで、このあいだも、道ばたにたおれそうになっているおばあちゃんをみつけて、自分の車にのせて、その人の家をたずねたずねて送りとどけたんです。あとでその人がお礼にきたとき、「とんでもない、たおれている人がいたら、人間として知らん顔ができないからやったまでのことです」って言ったらしいんですけど、やっぱり、どこかで親の後ろ姿を見てるのね。「世話好きは菅原の親ゆずりだ」っていわれるけど、これは全日自労の方針なんですよね。

新本　「親の後ろ姿を見て子どもは育つ」っていうのは事実だと思います。昔の人はむだなことを言ってないですね。

私も男の子三人、女の子三人の六人の子がおりました。一人を背中におんぶして失対に行ったわけですけれども、子どもは親の苦労を知ってて、「早く就職して、母さんの助けをしてあげなけりゃ」と言って、どの子も全部、中学を卒業して就職しました。女の子はどこでどう工面するのか、わずかですが、こづかいもくれますし、男の子はちょっとも無理を言いませんし、まん中の子は中小企業で労働組合の委員長もやりましたしね。

でも、やっぱり、自分の子の教育のことしか頭になくて、私が用があって訪ねていって

も、言いだしにくくて帰ってきちゃうようなこともありましたね。それで、「お母さんが来たら、『何か用があるんじゃないの』って、聞いてくれないと、言いそびれてしまうから、そういうようにして行き来をしようじゃないか」と言ったんです。「あの年になって、親の心もわからんのか」とグチばかりこぼしとったんではいかんので、やっぱり言いたいことは言わなければいけませんね。

伊藤　私も五人の子がいますが、子どもたちが育つころは貧乏のどん底で、長女が公立高校に合格したんですけど、生活保護を切られるので、昼間にはいれられなかったんです。

そのとき娘は「母ちゃんは貧乏を売り物にしている。親せきやだれかに頭を下げて金を借りて、昼間に入れようとするのが親の責任じゃないか、それなのに――」と抵抗しました。入りたい、入れられない、親も子もこんな悲しい思いはなかったですね。

子どもたちはみんな、苦学して大人になり、地方では案外、めぐまれたところに就職できましたが、給料は食費をのぞいて、全部自由にさせました。それは、子どもたちが青春を通してどんな道をえらぶか、みてみたかったからなんです。私はいつも「青春のすばらしい思い出をつくることは、金では買えない財産になるんだよ」「若さは失敗しても、やりなおしがきく」と、そんなことをいいながら生きてきたんですが、末の子は札幌市の障害者施設で働いていますし、東京の子は老人クラブで卓球のボランティアをやるなど、みんな、思いやりと暖かさだけは身につけてくれたようです。

武内　私もなかまの子どもの成長後の状態をだいたい知っていますが、不良だの、よた

ものだのになった子はいませんね。とにかくほったらかしで、修学旅行にも行かせられない、学用品もろくに買ってやれないという貧乏のどん底の中で、子ども同士のなかでも、さげすまれて育ってきたけれども、不良だのはいないの。高校へも上げられなかったし、小学校五、六年生のころから牛乳や新聞配達をやらせたり、勉強どころではなかった。ほんとうにかわいそうな思いをさせてきたのにね。

だから、私はそのことを、どこへ行っても誇りをもって話すのよ。いつだったか、新日本婦人の会の学習会で話したら、助言者にきてくれた大学の先生が「親の背中を見て子は育つ、とはよく言ったものです。母親が真剣に生活ととりくんでいく姿を小さいときから見てきたら、不良やよたもんになるわけがありませんよ」と言われました。現場でその話をしたら、「ほんとうにそうだねー」って、みんな喜んでね。

●サラ金に苦労させられても

横尾　そういう話をきくと、しゃべりにくいんだけど、うちの息子はサラ金に手をだして、金を貸してくれってきたのよ。いくら借りたのかってきくと、初めは三〇万ほどだったんだけど、その利息を払うためにまた借りるってんで、三〇何軒のサラ金に、利息だけで一ヵ月に五〇万も払わなきゃならないっていうでしょ。それで、議員さんにも相談したんだけど、私ができるところまでやってみようと思ったんです。

サラ金の店に行くと、ほっぺたにこんなキズのあるのが座ってるから、こいつら、どうやってやっつけてやろうかと思ってね。「とにかく元金は払うけど、利息は払えない。その

かわり私が保証人になる」って言ったわけ。息子もいっしょに行ったんだけど、心配で小さくなってるの。私なんかが行ったって、話をつけてくれるわけがないと思うものね。それで、「私が借りたんじゃないし、女房が借りたんでもない。女房が保証人になっているからって、オヤジが女房のハンコを押しただけじゃないか、女房のとこなんか行くな。気にいらなかったら、こいつが借りたんだから、どつくなりなんなりしてこい」とか、大きな声でさわいだのよ。そうしたら、こんなばあさんに大声だされたんじゃ、ほかのお客さんが寄ってこなくなると思ったんだろうね。奥の部屋に通されて、元金だけ、月に一万円ずつ銀行振りこみで返す、ということで話がついちゃったわけ。

それから三〇何軒全部まわったけど、あとはおもしろがって歩いたわよ。むこうが「政界につながってる」とか言えば、「こっちは労働組合につながってるんだ」とか、「うちのオヤジは組の幹部で、金貸しも、ふとんはぎも、あんたらと同じ悪いことをさんざんやって死んだんだ」とかハッタリをきかせてね。ほんとうにまあ、私もよくこうトンチがでるものだと思ったけど、全部、最初のところと同じ条件で話をつけちゃったの。「あんたも子どもがいるだろ、親がそんなことをやっていたらどうなるか考えないのか」とやりあったら、「おたくの言うとおりだ」って、サラ金をやめちゃった従業員もいました。

うちの婦人部のなかまにこの話をしたら、「そんなおもしろいところに、なんでつれてってくれなかったのか」なんて文句を言われちゃったけど、息子のしりぬぐいができるのも、全日自労で運動してきたおかげですね。

島田　私も、ふりかえってみると、よくやってきたなと思いますよ。末の子が一人になったときに、二、三日いなくなっちゃって、ほんとうに組合活動をやめて家にいようかと思ったこともあったし、オヤジが生きてたときはガンコだったから、おそく帰ると、枕元から灰皿がとんできてね。柱にあたって、バーンととびちったり。こっちもハラがたって、病人をひきずりおこして「なんのためにこんなにおそくなったのか、私自身のためじゃないじゃないか、みんなのためじゃないか、あんたのためでもある、子どものためでもあるじゃないか」と、夜中の二時までも三時までも、その日にやってきたことを全部言わなきゃおさまらなかったこともありましたよ。

浜本　私は三一歳のときに亭主と離婚したので、かわいそうな思いをさせてきた一人息子だったんですが、二七歳のとき、東京で交通事故にあって死んでしまいました。

あのときはもう、どうしていいかわからなくなって、よくないことも考えちゃったけど、そういうとき、なかまが泊りこんでまでなぐさめてくれたのね。いまは、なかまのために昼も夜も活動しているから、一人ぐらしのさびしさなんてまったく感じないけどね。

●核兵器廃絶の世の中を

司会　さいごに、〝七〇歳でもうひと花〟の思いを語っていただけますか。

大道　私がね、九〇になったら今世紀がおわるの。ソ連のゴルバチョフ書記長が「今世紀のうちには核兵器を廃絶しよう」と言いましたよね。ほんとうに二一世紀までには世界の力関係が変わるだろうと思うの。私は、本部の婦人部長をやめるとき、「はば広い統一戦

線の実現によって、私たちの夢と希望が実現されるよう、がんばりぬく」とあいさつしましたが、私は、いま、全国のなかまに言いたいの。「全日自労こそが、労働者階級に勝利の確信をよびおこす運動をしてきた。いまこそ天下をとる運動をしようじゃないか。そして、生きて生きて生きて、たたかってたたかってたたかって、いっしょに核兵器のない二一世紀を、この目で見ようじゃないか」って。

●まだまだ働きたい

横尾　そうですよ。私はまだ来年の三月まで失対にいられるけど、失対をやめても、家にひっこむわけにはいかないですよ。だって、全日自労が綱領でかかげてきた、失業だってなくなってないし、貧乏だってそうだし、戦争だって、安保条約があって基地があって、核戦争の危険は大きくなってるっていうんだから、やっぱりこれをなくす運動をして、長生きしてよかったといえる世の中をつくっていかなくちゃあ。

いまも事業団でとった日比谷公園の仕事に行ってますけど、事業団や任意就業事業で働きながら、地域で、世の中のお役に立つことをやっていこうと思っています。

武内　私たちは七〇歳でクビになるんだけど、地域には働きたい年寄りがいっぱいいますね。公園の草とりをやっていれば、散歩にきたおじいさんから「私も働かせてほしい、どうしたらいいか」って聞かれますしね。

こんなこともありました。川崎では老人のバス代はただなので、バスで通勤しているんですが、帰りにいつもいっしょになるおじいさんがいるの。それも、お風呂あがりで、手

ぬぐいを頭の上にのせて、買い物かごさげてね。だから、「おじさん、いい身分だねー、私ら、いままで汗びっしょりになって働いてたんだよ」って声をかけたら、そのじいさん、「あんたたちこそいい身分だ。わしら、働きたくてしょうがないけど働くところがない。職安に行ったって相手にしてくれない。あんたらこそいい身分じゃないか」ってね。

いろいろきいたら、「おらあ、風呂代かせぎにきてるんだ」っていうの。なぜかというと、老人いこいの家がそばにあって、風呂はただで入れるし、そこの商店街は安いから、ばあさんに買い物をたのまれるんだって。

それで、全日自労がつくった事業団が、駅前の自転車整理の仕事をうけたとき、そのじいさんに話をもってったら、喜ん

でねー。すぐ応募するってことになったんだけど、「わしら、こんなに働きたいのに、仕事がなかったから、ほんとうにあんたらをうらやましく思って、うらみに思ってた」って言うの。

ところが、いざとなったら、「おらあ年とってるから、大きな自転車やオートバイなんか持ちあげられないかもしれない」って言うの。それで、「おじさん、心配するな、いいことおしえてやるよ。奥さんが自転車にのって、そのへんにおこうとしたら、〝奥さんこっちだよ、こっちもってきてくれよ〟と言えば、奥さんがちゃんとおくよ。子どもが自転車ほっぽらかして、あっちの方に行ったら、〝坊や、そんなとこおいといたら盗まれるよ、おじいちゃんがるすばんしててやるから、ここにおけ〟って言ったら、喜んでもってくるよ。あんた、それをやればいいんだ。アタマ働かせろ」って言ってやったの。

あとでバッタリ道で会ったら、顔色がよくなって、つやつやしてるの。そしてね、「おら、もはん生だよ、もはん生。あんたにおしえてもらったとおりだよ」って。

そういうかたちで、私たち、働きたい年寄りをいっぱい知ってますね。だから、地域の年寄りの仕事の要求をもっともっと結集して、こんど労働省につくらせた高齢者就業機会開発事業を、実りのあるものにしていきたいと思っています。

●これからもいっぱいやることが

菅原　私たちのなかまの中には、身寄りもなくて、ひとりぐらしのおじさんがいますが、病気してどうしようもないというので、行ってみたら、くさくて部屋に入れない。トイレ

も外でやらないで、洗面器の中とかにして、ふたをしてある。こりゃだめだってんで、片づけて入院させた、なんてことがよくあるのね。

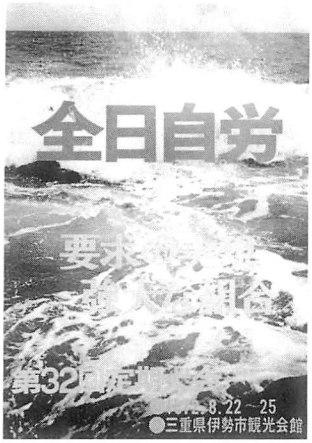
このあいだは、四〇年間、家族と音信不通のおじさんが亡くなって、石川県のどこそこで生まれたってことは聞いてあったから、問いあわせたら、「うちにはお骨がきて、もう何年か前にお葬式がおわってる。いま、ナマの仏をもってこられてもどうしようもない」っていうわけ。一〇〇万円というお金があるんだといっても、「お金があっても、おじさんは、とっくにうちにきてる」っていうわけ。それで、仏様は横浜の方に埋葬したんですけど、この石川の家の方にも、心配してもらったし、他人をおじさんだと思ってみてもらったってことで、一〇万円をお線香代にって送ったの。そうしたら、喜んでね。「全日自労って組合はそういうことまでするんですか、労働組合っていうのは、自分の賃金のことしかやらないと思ってた。死んだお骨まで世話してくれるなんて、聞いたことがない」って、松茸を送ってくれたんです。

こんなことをやるのは、ほんとうに全日自労しかないと思うのね。私は娘にも言うんですけど、全日自労は私のためにも、家族のためにも教科書であり、私を生きかえらせてくれたところなんですね。だから娘も、「お母さんから組合をぬいたら空っぽになってしまうから、いいようにやりなさいよ」って言ってくれるの。これからも、いっぱいやることがあるから、いいようにやりますよ。

伊藤　そうよね、身寄りのないなかまを死んでからもめんどうをみる、こんな労働組合

がほかにありますか。「ゆりかごから墓場まで」というけど、全日自労の運動は、福祉で始まり、生涯、福祉からはなれることができない組合です。だから「医療」「年金」「雇用」、この三本柱を守る運動をどう国民運動にしていくかが大きな課題だと思います。

政府は「自助努力」「相互扶助」「家庭基盤の充実」とか言いますけど、それは、先進国日本の社会保障の「合理化」と貧困を物語っているにすぎないと思っています。一九七三～七四（昭和四八～四九）年、総評が統一行動をつみかさね、年金ストをかまえたとき、七〇歳以上の老人医療が無料になり、健康保険が五割から七割給付になり、国民年金が大はばに引き上げられましたけど、もう一度、年金、医療、仕事の要求で国会を包囲するような国民運動にできないかなあと夢みているんです。



●昔話を語り、カラオケで仲間と

新本　私、昔話が好きで、孫と近所の小さい子を毎週呼んで、一時間話しあいをしているんです。三〇分はみんなの言うことを聞いてあげる。三〇分はおばあちゃんの言うことを聞いてよ、その中に昔話が一つ入ってるからね、と言って。その昔話がおもしろくて、寄ってくるんです。

仲の良い野菜村

昔むかし、ある所に、とても仲の良い野菜村がありました。その村で一番世話好きなおトウフさんが、長い間、病気で寝込んでしまいました。ある日、大根さんが大変心配して、どれどれ、今日はみんなをさそって、おトウフさんのお見舞に行ってこようかなあと、おとなりの人参さんに相談に行ったそうな。おトウフさんが長いこと寝込んでいるので、何なら一緒にお見舞に行かんかね。ところが人参さん、今日はなあ雨も降るので畑仕事も出来んけん、今一パイチビリチビリやってた所、こんな真赤な顔して見舞もどうかと思うてなあ、おとなりのゴボーさんと一緒に行ってくれんかなあ。

大根さんも仕方なくゴボーさんをさそいに行ったら、私も最近忙しくて、もうはや何日も風呂にはいっておりませんけん、こんな真黒い顔して見舞も気が引けるんで、となりの田いもさんと一緒に頼みますけん、どうぞよろしゅに言って下さい。

田イモさんに相談したら、やれやれ、せっかく、おさそいしてくれましたのになあ、私もお見かけ通り貧乏人の子だくさん、子供を大勢かかえて見動きも取れませんでなあ、私も気にかけて心配しとると、よろしゅに言うて下さい。

大根さんは仕方なく、代表して一人お見舞に行ったそうな。おトウフさん今日は、お体のおかげんはどうかいなあ。みんな心配しておりますけんど、都合が悪く私一人で来たんです、御無沙汰ばかり申訳ありませんのう。なんのなんのありがとう、大分、元気になったので近い内には朝の味噌汁の手伝いも出来ると思いますがなあ、元気と言っても七十も過ぎたら取る年は争えまへん。若い時のようなまめ㊐にはようなりまへん。　おはり

最初は、おやつもだしてたんですけど、みんなくるとき、お母ちゃんに言って、おやつをさげてくるようになりました。それから、話の前に、一円募金の箱を机の上におくんです。そうすると、「ばあちゃん、ためてきたよ」と、一円玉や五円玉を入れてくれるんです。こういうこともやったらいいと思いますね。

それから、これからも組合費をはらって、組合においてもらって、みんなのつながりをとって、仲間の相談相手になりたいと思っています。

「おいしいものはだまって食べていいから、そのかわり、こまったときに、部屋の片すみで、どうしようかと一人で涙を流すようなことだけはせんようにしてくれ、電話一本いれてくれたら、二人で役所へも行ってみましょう、相談相手になるから」と約束をしている

んです。

島田　私はまだ失対にのこれますけど、さびしくなったら夜中でもいいから電話するように言ってるの。ひとりぐらしの人は、テレビでメロドラマを見るとさびしくなるらしいから、もっと楽しいのを見るようにって言ってるんです。

じつは、このあいだ、五万円ほどだして、カラオケを買ったんです。現場に演歌が好きな人が何人かいるから、さみしかったら、うちにあつまって、パーッと発散してもらおうと思ってね。

こんどのメーデーでは、老人給食や病院の清掃などをしている事業団の組合員の人たちがズラッと先頭にならんだの。すばらしいなと思いました。この人たちはよく勉強もするしね。そういうところにも足場をつくりながらがんばっていきます。

松沢　五、六年前の中央でのメーデーで、おみこしをだして、婦人のなかまたちが中心になってねりあるきましたけど、来年は、七〇歳以上のなかまで「元小町、もうひと花咲かせます」とか書いた横断幕をもって〝小町音頭〟なんてのをつくって踊りましょうよ。「元の小町が踊ります、自民党ギャフンとけとばして」とかね。

ほんとうに、みんなが〝長生きしてよかった〟といえる社会、子どもたちに誇れる平和な社会をつくりあげるため、若い人といっしょになって、もうひと花も、ふた花も咲かせていただきたいと思います。いつまでも元気で、がんばりましょうね。